

平成 26 年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録

はじめに

所長 福島 正実

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るもので。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成 12 年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、平成 26 年度で 15 回目の開催となりました。

本年度は全国的にみても未解明な部分の多い、江戸時代の墓制について、墓地・墓域、埋葬施設、副葬品に焦点をあて、日本海沿岸各地域における資料の集成を行うとともに、その変遷や共通性・地域性を明らかにしたいと考え、テーマを「江戸時代の墓」としました。資料の集成や報告にあたられた皆様に感謝申し上げます。

1 主 催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

2 会 場 石川県埋蔵文化財センター研修室

3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等 90 名

4 内容及び日程

・事前の打合 10 月 23 日（木）午後 3 時～

・調査研究集会 10 月 24 日（金）午前 9 時～午後 4 時 30 分

地域別報告

九州地方 時津裕子（徳山大学）

山陰地方 中森 祥（鳥取県教育委員会）

北陸地方（福井県）村上雅紀（越前町織田文化歴史館）

北陸地方（石川県）庄田知充（金沢市埋蔵文化財センター）

北陸地方（石川県）和田龍介（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

北陸地方（富山県）田上和彦（高岡市教育委員会）

北陸地方（新潟県）相羽重徳（佐渡市役所）

東北地方 高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター）

討論

・資料見学会 10 月 25 日（土）午前 9 時～12 時

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第 1 回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第 2 回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第 8 号
第 3 回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第 10 号
第 4 回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える	第 11 号
第 5 回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第 13 号
第 6 回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心に－	第 15 号
第 7 回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第 17 号
第 8 回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第 19 号
第 9 回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第 21 号
第 10 回	H21.10.23	日本海域の土器製塙－その系譜と伝播を探る－	第 23 号
第 11 回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－	第 25 号
第 12 回	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－	第 27 号
第 13 回	H24.10.26	弥生時代の墓	第 29 号
第 14 回	H25.10.25	舟と水上交通	第 31 号
第 15 回	H26.10.24	江戸時代の墓	本号（第 33 号）

近世墓にみる階層性

—筑前秋月藩城下の寺院墓地を対象として—

時津 裕子（徳山大学）

はじめに

九州地方では、近世墓の調査数自体が少なく、資料としてまとめたものが見られない時期が長く続いた（井上 1978；小田 1990）。90 年中頃以降、女狐近世墓地（田中 1996）など詳細で良質な調査報告が増加するが、やはりほとんどは開発・改葬に伴う緊急調査で、特定の集落や一族の墓域を対象とする単発的なものであった。このため、近世墓研究から当該期の階層化社会を総体的に論じるのは困難なままであった。

こうした中で、筆者は筑前秋月藩城下の寺院墓地において継続的に調査を実施してきた。秋月藩は福岡藩の支藩にあたり、5 万石の小藩ながら、政治的・経済的には当初から高い独立性を保ってきた。家臣団は、藩が定める家格・役職・禄高等によって厳格に階層化されており、儀礼の際のふるまいや城下の空間構造などにもその構造ははっきりと表れていた（柴多、1980；時津、2000）。筆者が目指したのは、この階層化社会の全体を視野に入れた状態で、近世墓標から階層構造を抽出し、解釈することであった。

1. 調査方法

城下内で近接する、寺格・宗派の異なる 4 寺院（古心寺：臨済宗、長生寺：曹洞宗、大涼寺：浄土宗、淨覺寺：浄土真宗）が保有する墓地内の約 700 基について、墓石の実測、写真撮影、刻印内容や装飾に関する記録を行った。現在まで祭祀が継続されている墓がほとんどであるため、下部構造に関するデータは得ていない。また一族ごとのまとまりが明確な墓域については、簡易測量を行い、各墓石の空間配置も記録した。

2. 分析

（1）型式学的検討と編年

作成した実測図の形態特徴・法量を用いて、属性分析・多変量解析を実施し、11 の墓石形式と 21 型式を設定する型式学的分類および編年を行った。また墓石形式別にまとめたセリエーショングラフを作成し、年代が下ると主流となる墓石形式が板碑型、櫛形、角柱型へと交替する一方で、時代を問わず、自然石という代替選択肢があることが明らかになった。また、高階層者のものとされる笠付型、僧侶の無法塔型、児童に用いられる光背形も、長期にわたって一定の割合で存在することがたしかめられた。

（2）墓域ごとの比較

明確なまとまりを形成する 9 つの墓域（黒田家 L、黒田家 C、宮崎家 G、宮崎家 E、林家、木付家、磯家、遠山家、加峯家）を取り上げ、形式の使用頻度、サイズ（墓石の塔身高）、刻印・記載内容等の比較を行い、これらのデータを総合することで各墓域の階層を推定した。

（3）文献史料との対照

墓石に記載された被葬者の俗名を、幕末から明治期にかけて編さんされた藩内の役職担当者一覧（『秋月藩累代役人名列』、『秋月諸士以下共名付』）や家臣一族の出自と系譜（『秋月諸士系譜』）、分限帳（『秋月諸士分限』、『秋月役々分限』）に記された氏名と照合し、被葬者の家格・役職・禄高（石高）数、武芸や学問社会貢献など個人の功績についての情報を得た。また一部被葬者については、城下の古地図と照合することで居宅（敷地）の位置と大きさが判明した。

3. 考察

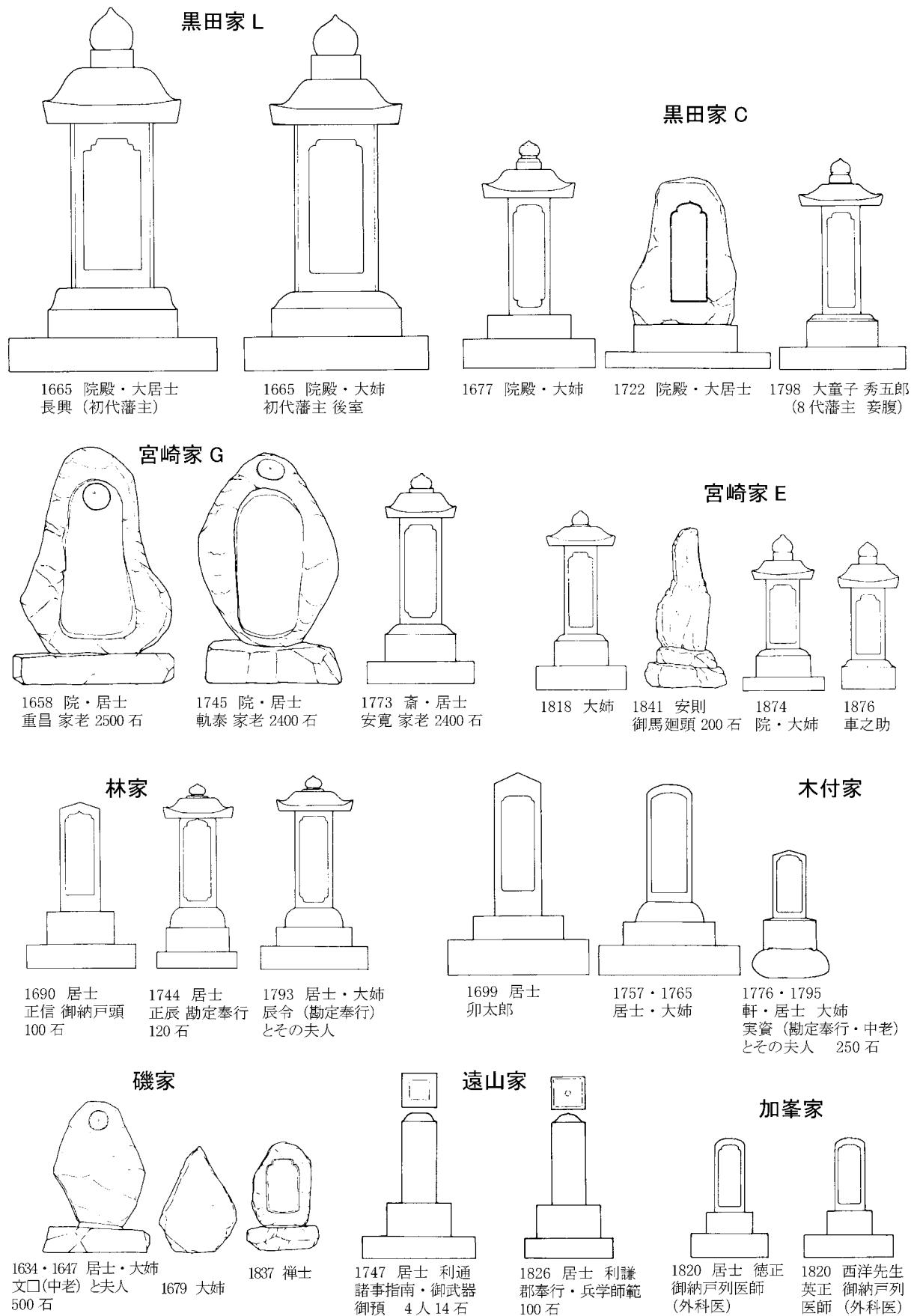
墓石の形態（形式）、サイズ、戒名等の考古学的分析によってもたらされた階層の推定結果は、文献史料から明らかになる被葬者情報と概ね一致していた。墓石サイズの格差は数千石を受け取る重臣から100石～数人扶持の禄が支給される下級武士間で明らかであり、そのことはまた、上級武士の指標とされる笠付型墓石の選択率や、戒名の格（院（殿）号の有無、位号の種類等）や個人の功績など記載事項においても同様であったといえる。ただし、これらの要素を複合させて階層推定する場合、やや複雑な様相を呈することになる。形態×サイズの組み合わせで見たとき、たとえば藩主の子女（黒田家C）と家老職を輩出した重臣一族（宮崎家G）を比較すると、使用形式（笠付型の頻度）で勝るのは前者であるが、サイズで勝るのは圧倒的に後者となる。形と大きさとどちらの要素を優先させて判断すればよいのであろうか。この問題は、都出（1989）が古墳を例として言及したように、考古学的推定の難しさや限界を示すものであるといえるだろう。しかし同時に、その上下関係が判然としないところが、高度に階層化された複雑な社会においては、有効に機能している側面もあるのではないだろうか。一族の政治力や経済力を誇示することには利点だけでなく、他の一族との競合や対立を深めるリスクがある。そして緊張関係に陥る相手が、制度や社会通年によって自分より高位の階層と位置づけられている場合、リスクは最も大きくなるだろう。宮崎家が藩主の子女一族を凌駕するサイズの墓を建てる際に笠付型墓石を決して用いないことも、社会戦略の一環として解釈できるかもしれない。

【文献】

井上裕弘編 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』, 9 福岡：福岡県教育委員会。
 小田和利寛編 1990 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』, 16. 福岡：福岡県教育委員会。
 柴多一雄 1980 秋月の歴史 後藤元一・工藤卓・宮本雅明・齊藤恭助・阿部雄一郎編『秋月』甘木市教育委員会
 田中裕介 1996 女狐近世墓地一大分市高崎所在女狐集落近世共同墓地の調査－『九州横断自動車道関係調査報告書』, 5. pp.39-271.
 都出比呂志 1989 古墳時代の中央と地方 『古代史復元』, 6 講談社
 時津裕子 1998 近世以降の墳墓の型式学的研究—筑前秋月城下を中心として—『人類史研究』, 10 : 74-96.
 時津裕子 2000 近世墓にみる階層性—筑前秋月城下の事例から—『日本考古学』, 9 : 97-122
 西川希水 『秋月藩累代役人名列』, 『秋月諸氏分限』, 『秋月諸氏以下共名付』
 森三太夫 『秋月役々分限』

第1表 各墓域の総合情報

墓域名	所在寺院	存続期間	家格等	役職等	石高／扶持高	墓石形態	サイズ	戒名
黒田家L	古心寺	1635～1892年	藩主一族	歴代藩主と正室	—	特大笠付型中心。 五輪塔、宝夾印塔	250cm程度(笠) 110cm程度(五)	院殿号／大姫
黒田家C	古心寺	1677～1888年	藩主一族	藩主の子女と側室	—	笠付型、自然石	90～150cm	院殿号・大姫、 大童子／大童女
宮崎家G	長生寺	1625～1773年	馬廻(小書院)	家老を輩出。	2200～2500石	自然石、笠付型	160～200cm 80～130cm	院・居士／大姫 中心
宮崎家E	長生寺	1796～1901年	馬廻(小書院)	馬廻頭、中老	200石	自然石、笠付型	50～110cm	院・居士／大姫 中心
林家	長生寺	1690～1849年	馬廻(小書院) ～大書院)	鉄砲頭、御側筒頭、勘定奉行、 御納戸頭	100～120石	自然石、櫛形、板 碑形。笠付型若干	60～110cm	居士／大姫 信士／信女
木付家	長生寺	1699～1918年	馬廻(大書院)	鉄砲頭、馬廻頭、中老	250石	板碑形、自然石、 櫛形	50cm台が最頻 80～120cmも	居士／大姫 信士／信女
磯家	長生寺	1671～1932年	馬廻(大書院)	勘定奉行、郡奉行、目付頭、御 用役等。	100石	自然石、櫛形	50～100cm	居士／大姫 信士／信女
遠山家	長生寺	1734～1908年	無足～馬廻 (大書院)	勘定奉行、郡奉行等、御武器 御預等。藩校兵学教官を歴任。	90～110石	尖頭・台頭角柱が 大半、自然石若干	50～80cm 60cm台が最頻	居士／大姫 中心
加峯家	長生寺	1802～1884	無足列～御納 戸列	西洋外科医	110人扶持	櫛形	60cm台	居士／大姫 中心



第1図 各墓域の実測図 (S=1/50)

山陰における近世墓

中森 祥

(鳥取県教育委員会文化財課)

1. はじめに

山陰両県においては近世墓の調査例が多いとは言い難い。管見の限り、島根県は16遺跡、鳥取県では9遺跡にすぎない。このうち数基から10基程度がまとまって検出されている例と、50基以上の大規模な事例とがある。ここではとくに、まとまって近世墓が検出されている遺跡を中心に、墓壙形態、墓地形成、そして墓から出土する遺物について比較検討を行なっていく。

2. 墓地形成と墓壙形態の変遷（第1図5～7）

100基以上がまとまって検出されている清水大日堂裏古墓（安来市）、門前第2遺跡（大山町）、松原小奥遺跡（鳥取市）をみると、いずれも16世紀代（後半以降）に造墓が開始し、近現代まで墓地として営まれている。その在り方をみると、門前第2遺跡でははじめ丘陵の西縁部に列状に展開するが、その後18世紀（Ⅱ期）になって東及び南側を溝で区画し、その内で造墓されるようになる。そこでは必ずしも規則的な配列は見いだせず、切り合いも甚だしい。松原小奥遺跡もⅠ期（16～17世紀）からⅡ期（18世紀代～近世末）への墓壙形態および配列については同様で、やはりⅡ期以降の規則的な配列はない。一方清水大日堂裏古墓AⅠ区西（80基）では、各墓の切り合いがほとんどない整然とした配列である。細い丘陵上を平坦にくりだし、東・北・南の各辺は溝はないものの、ほぼ直線的に区画されていることが看取できる。また半坂古墓群2区では、丘陵中央部にある古墳状高まりの裾部周囲に弧状をなして墓が連なるという特殊な配列をしている。いずれにせよ、18世紀になって墓数が増加することについては共通し、墓域の形成には地域的な特色が現れてくることが考えられよう。

墓壙形態の変遷について松原小奥遺跡では、Ⅰ期には長方形で長径－短径比が概ね4:3（CⅠ型）の墓壙がつくられる。このタイプは続くⅡ期にも若干あるが、径の長短比が小さくなるCⅡ型が主流になっていく。またこれはCⅠ型に比べ深いものが多い。そしてⅡ期になると、方形（B型）、円形（A型）墓壙が出現し主流となり、前者はそのままⅢ期（近代以降）以降も継続する。この傾向は門前第2遺跡も同様であるが、ここではⅡ期について18世紀中葉～後葉、19世紀代の2時期に細分され、A・B型が19世紀代から主体となることが判明している。またC型については深浅2種があり、前者がⅠ～Ⅱ期に主となるのに対し、後者はⅡ期後半から出現する。浅いタイプは松原小奥遺跡では確認されず、地域的な差異が看取できる。

3. 墓壙内出土遺物の様相

20基前後以上の墓が検出された遺跡において、墓から出土する遺物の出土（副葬）率についてみると、古市遺跡（鳥取市、14.4%）、板屋Ⅱ遺跡（飯南町、20%）が2割以下と低く、続いて5割前後の遺跡として田住桶川遺跡（南部町）などがある。大塚岩田遺跡（大山町）、石州府古墓群（米子市）、陰田古墓群（同）、清水大日堂裏古墓の4遺跡では65～70%とかなり高い。陰田古墓群はA群（17世紀前半）は36.0%と低いが、B群（18世紀以降）では84.2%と非常に高率になる。またA群とほぼ同時期の谷ノ奥遺跡（松江市）では28.6%となっておりやはり低い。出土率が5割以上の諸遺跡がいずれも18世紀以降に比定されることから、この時期から副葬品をもつものが増加する傾向が窺えよう。

筆者は山陰両県の近世墓から出土する副葬品の組合せを検討し、銭貨・刃物類・煙管という3点が基本的なセットとなる可能性を指摘し、それを死出の旅立ちのための「トラベル・セット」と規定した（中森2008、第1図3・4）。こうしたセットは鳥取県西部（伯耆特に西部）において顕著に見いだ

せ、これに、西接する出雲東部と隠岐では、やや類する傾向が見て取れる。一方、鳥取県東部（因幡）では古市遺跡、松原小奥遺跡併せて400基を超える墓が検出されているにもかかわらず、非常に副葬される率が低い。また、出雲西部から石見にかけても因幡同様、副葬率が低くなっている。

検出事例の多い西伯耆のうち門前第2遺跡では、銭貨が出土する事例は検出数の半分以上を占める。2点セットでは銭貨と刃物、銭貨と煙管がそれぞれ10例ずつ、3点でも銭貨・刃物・煙管のセットが10例ともっとも多く、この3点を基本としていることが窺える。また2点セットでは1例しかなかった毛抜が、3点では6例、4点のうちが1例と副葬の費目が増えるにつれてそこに組み込まれている。この遺跡から直線で2.5kmほどに位置する大塚岩田遺跡では、銭貨と刃物のセットが多く（16例）、これを含め2点セットが26例（30.6%）と主体となる。一方3点セットの事例が3例（3.5%）と少ない。両遺跡の副葬品は同じような構成であるので、概ね同様の習俗を有していたと考えられるが、各セットにおける事例数の多寡はそれぞれの集落の性格を反映した可能性も考えられよう。こうした3点以上をもつものは門前第2遺跡で17例（12.9%）であったが、陰田古墓群では9例（23.7%）と割合が高い。特に、先にみた4点の組合せが5例もあり、このセットが強く意識されているといえよう。また、同遺跡は銭貨のみの事例も12例と多いが、一方で2点セットが4例（10.5%）と少ない。のことからも4点ないし3点セットを、副葬品の一つの基本としていたといえる。

出雲において3点以上のセットは半坂古墓群で3例（5.4%、うち4点セット1例）、清水大日堂裏古墓群で1例（1.0%）しかない。他に前者では2点セット3例、銭貨のみが8例となっており、全体として副葬品は乏しい。後者では、3点が1例あるのみで、4点はない。しかし2点のものが13例（13.0%）とやや多く、大塚岩田遺跡と同様な傾向が窺える。さらに、東出雲から西にある各事例も2点セットがせいぜいで、銭貨のみを入れるものが主となっているが、それも石見ではほとんどみられなくなる。以上、大変難ばくにその様相をみてきたが、「トラベル・セット」としたものをもつ事例は西伯耆から東出雲に限られ、さらに、各墓地群の性格によって異なる可能性がみえてきた。

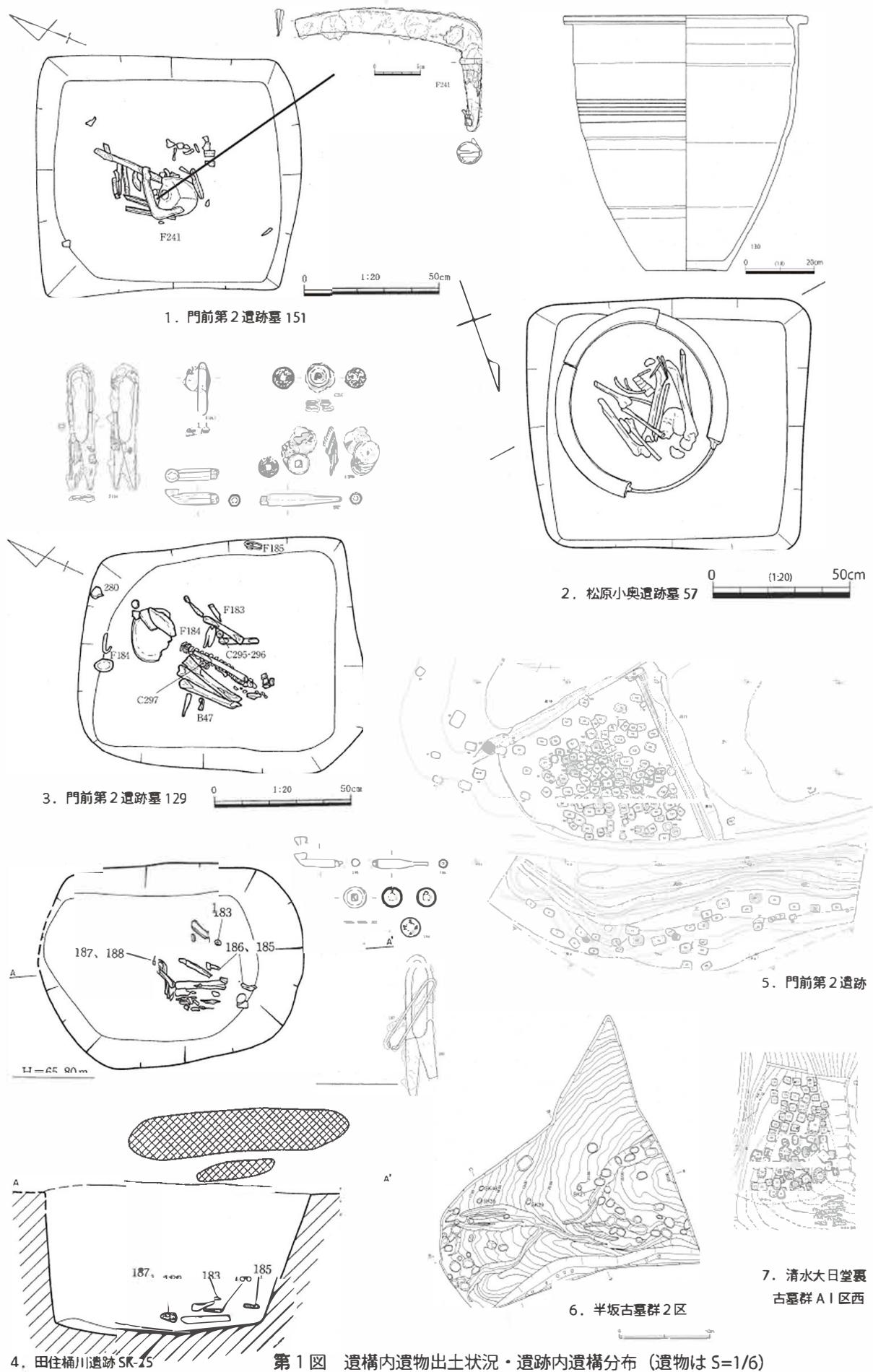
こうした副葬品の埋納方法を西伯耆における民俗事例にみると、納棺の際死者の首から頭陀袋をさげ、その中に六道銭や経文、生前の愛用品を入れたり、六道銭の穴に紐を通し、首からさげるなどしている。同様なものは東伯耆でもあり、生前の愛用品の他、六道銭を棺内に入れたという。また、門前第2遺跡で鎌の出土が顕著であった。墓内埋土上位や頭蓋骨上に接着するような状態で出土する（第1図1）ものが多く、少なくとも銭貨や煙管などとは異なり、遺体より上位に置かれていたことが想像できる。実は、現在も墓上の標石横に鎌の柄を地面につきたて、刃先を外側に向ける事例があり、この習俗が近世まで遡ることが裏付けられた。

4. おわりに

以上、ある程度まとまって検出された事例を中心に、山陰における近世墓の概要について検討してきた。墓擴と埋葬形態の変遷の関連性や、副葬された品々のセット関係など、ある程度共通するものがある一方、副葬品や品数の多寡、因幡における越前焼などを用いた甕棺（第1図2）や棺内に稻藁を敷き詰める事例など地域的な特徴も窺える。また、現代にまでつながる墓制の様相に関わる材料があることがわかり、今後さらに民俗学的な事例も踏まえながら検討していくことが必要であろう。

【引用・参考文献】（各報告書は割愛した。）

北 浩明・中森 祥 2007「中近世墓群の考古学的考察」『門前第2遺跡II（菖蒲田地区）』鳥取県埋蔵文化財センター
坂田友宏 1995『神・鬼・墓—因幡・伯耆の民俗学研究—』米子今井書店
中森 祥 2008「トラベル・セットの成立—山陰における近世墓の副葬品から—」『出土銭貨研究』第2号
中森 祥 2010「松原小奥遺跡中近世墓の様相とその位置づけ」『松原古墳群II・松原小奥遺跡』鳥取県教育委員会
中森 祥ほか 2012「山陰の近世墓出土銭貨」『宮田進一氏追悼集』出土銭貨研究会・北陸信越出土銭貨研究会



越前・若狭における近世墓の様相

村上 雅紀（越前町織田文化歴史館）

1. はじめに

本稿では、福井県内における近世墓の調査事例を埋葬方法・遺体収納容器・階層性といった視点から整理し、必要に応じて中世墓や近代の民俗事例も参考に、様相の把握に努めたい。

2. 近世墓の様相

(1) 埋葬方法

越前では、多賀谷左近墓所（金津町教委 1995）・三峯村墓地跡（鯖江市教委 2000）・伝無量寺跡（福井県教委 1975）で火葬骨が検出され、崇福寺（福井市教委 1997）から蔵骨器が出土した。また、乗泉寺遺跡（田中 1989）出土の越前焼甕や、明神山 18 号墳（福井県埋文 2008）の土坑群も火葬墓に関わるものと考えられる。中世墓の様相をみると、13 世紀後葉頃から 16 世紀代にかけて火葬墓が主流となり（赤澤 2006）、近世においても火葬が大勢を占めていたとみられる。その背景には、浄土真宗の広い普及がうかがえるも、法華宗などでは近年まで土葬を行っていた記録が残り（福井県 1984）、資料の蓄積を待って判断する必要があろう。

若狭では、今市遺跡（美浜町教委 2007）・浜禰遺跡（同志社 1966）で土葬骨が検出されている。中世墓の様相をみると、越前と同じく火葬墓の事例が圧倒的に多く（赤澤 2006）、土葬の出現時期が注目される。15 世紀から 16 世紀初頭に位置づけられる芳春寺山中世墓群では、①火葬墓単一、②土葬墓単一、③火葬・土葬併存といった多様な埋葬方法が認められる（福井県埋文 2006）。土葬墓直上に火葬墓が造営される遺構や、火葬墓が土葬墓に切断される事例から、単に火葬から土葬に転換したのではなく、15 世紀頃から墓地内において土葬墓が増加するものの、いまだ火葬墓が併存し、16 世紀初頭にむけて土葬墓へ転換していく様相がうかがえる。

(2) 遺体収納容器

越前では、多賀谷左近墓所・崇福寺・乗泉寺遺跡・三峯村墓地跡から蔵骨器が出土し、4 遺跡 5 例のうち 3 例が越前焼である。これらの越前焼甕・壺は火葬骨の納入に用いられ、土葬にともなう甕棺としては利用されていない。遺跡の時期比定が可能な乗泉寺遺跡や三峯村墓地跡をみると、17 世紀初頭から 18 世紀代を通じて越前焼を蔵骨器とする。蔵骨器に越前焼を採用するのは、生産地が近く比較的入手が容易であったことに起因するのであろう。ただし、乗泉寺遺跡からは性格不明の唐津焼甕 2 点が発見され、多賀谷左近墓所では信楽焼壺が用いられる。

一方、蔵骨器を有しない伝無量寺跡や明神山 18 号墳では、荼毘に臥した遺骸を土坑内に直葬していたと考えられる。三峯村墓地跡の蔵骨器中からは鉄釘が検出されており、遺体を木棺に納めたまま荼毘に臥し、焼成後に火葬骨とともに木棺の残片を蔵骨器に納めた様子が復元できる。火葬の採用と木棺の使用が併存し、必ずしも木棺は土葬と直結するわけではない。

若狭では、蔵骨器の使用は認められず、土葬にともなう木棺および座棺の利用が顕著である。今市遺跡では座棺と方形木棺、浜禰遺跡では長方形木棺と座棺が検出され、日引遺跡（若狭歴民 1987）では土坑の形状とシュロ製紐の遺存から座棺の存在が想定される。芳春寺山中世墓群から木棺と考えられる痕跡が検出されており、16 世紀初頭にはすでに木棺が使用されていた。遺体の収納方法をみると、今市遺跡 SK 2 で仰臥屈葬、浜禰遺跡第 1 号墓で仰臥伸展葬と異なり、多様な形態による埋葬が行われている。

第1表 越前・若狭の近世墓

No.	遺跡名	所在地	遺構名	時期	上部構造	下部構造		葬法	遺物			備考
						土坑平面形	収納容器		土器	銅錢	その他	
1	多賀谷左近墓所	あわら市柿原		慶長12 (1607)	石龕 宝鏡印塔		信楽壺1	火葬				戦国武将・多賀谷左近三経の墓所遺構・遺物図なし
2	崇福寺	福井市日ノ出					棺桶2 藏骨器1	土葬? 火葬?				不時発見 遺構・遺物図なし
3-1	乗泉寺遺跡	福井市笛谷町		16c末～ 17c初			越前甕1	火葬?			唐津甕1	唐津甕(16c末～17c前)の性格不明 遺構図なし
3-2	乗泉寺遺跡	福井市笛谷町		17c後			越前甕1	火葬?			唐津甕1	唐津甕(17c中～後) の性格不明 遺構図なし
4	三峯村墓地跡	鯖江市上戸口町	D-83	18世紀	角礫?	不整形	越前壺1	火葬			鉄釘	
5	伝無量寺跡	南越前町上平吹	ピット3			円形		火葬	土師皿1	寛永通宝 3		土師器片あり 遺構・遺物図なし
6-1	明神山18号墳	敦賀市坂ノ下	1号土壙			不整形		火葬?		寛永通宝 1		覆土中より炭化物 近世墓か
6-2	明神山18号墳	敦賀市坂ノ下	2号土壙			楕円形		火葬?				覆土中より炭化物 近世墓か
7-1	今市遺跡	美浜町佐田	SK1			円形	座棺	土葬	土師皿 細片1			蓋材上に重し石
7-2	今市遺跡	美浜町佐田	SK2			隅丸方形	方形木棺	土葬				仰臥屈葬
8-1	浜禰遺跡	おおい町大島宮留	第1号墓			隅丸長方形	長方形木棺	土葬	土師皿3		鉄製短刀 1 鉄鎌2 鉄製品1	蓋材上に重し石 仰臥伸展葬
8-2	浜禰遺跡	おおい町大島宮留	第2号墓			楕円形	座棺	土葬				座臥屈葬 第1号墓を切断
9-1	日引遺跡	高浜町日引	方形石組		方形石組							火葬場か
9-2	日引遺跡	高浜町日引	集石A		方形集石	隅丸長方形	座棺?	土葬?			シユロ紐	
9-3	日引遺跡	高浜町日引	集石B		方形集石							棺台か
9-4	日引遺跡	高浜町日引	集石C		円礫集石					寛永通宝 1		
9-5	日引遺跡	高浜町日引	経塚集石	文化8 (1811)	石塔 方形集石						経石? 8870	
9-6	日引遺跡	高浜町日引	六角石幢	天保3 (1832)								光明真言銘

(3) 階層性

越前では、多賀谷左近墓所で石龕および宝篋印塔が用いられており、福井藩の家老であった多賀谷左近の家格が示される。石龕の類例は、福井市重立町日吉神社の朝倉大炊助景賢石殿（1556）、坂井市三国町滝谷寺の開山堂（1572）、和歌山県高野山奥の院の越前松平家石廟などがあり（金津町教委 1995）、いずれも高位の武士や大寺院によって造立された。一方、他の遺跡では石塔の使用は認められず、地表上に墓標を有しない。副葬品をみても、伝無量寺跡から土師器皿1点と寛永通宝3点が、明神山18号墳1号土壙から寛永通宝1点が出土しているのみで、明確に階層差を示す資料はない。

若狭では、両墓制に通有の事例として「詣り墓」の墓標に石塔が使用される。反面、「埋め墓」には礫のほかに永続的な墓標を用いず、発掘された近世墓においても地表上に明確な墓標はない。また、墓の下部構造をみても土坑内に収納容器を埋納するのみで、石櫛や石室などの施設は認められず、遺構の構造に階層性の差異を見いだしがたい。副葬品は、今市遺跡SK1で土師器皿片1点、浜禰遺跡第1号墓で土師器皿3点・鉄製短刀1点・鉄鎌2点・不明鉄製品1点、日引遺跡集石Cで寛永通宝1点が出土した。浜禰遺跡第1号墓は他の遺構に比べて副葬品が豊富であり、木棺の内外に鉄製品が配されるなど、被葬者が丁重に埋葬された状況を看取できる。報告者が指摘するように、村内の有力者の墓であろうか（同志社 1966）。

(4) 両墓制の成立時期

若狭における墓制の変遷を考えるとき、両墓制の問題を避けることはできない。両墓制とは、「死体埋葬地点に施された一連の墓上装置の集合」と、「それに対応し死者供養のために建てられた仏教式石塔墓塔の集合」の両墓から構成される墓制である（新谷 1991）。一般には、「埋め墓」・「詣り墓」と呼称される二つの形態の墓地を有し、北陸では福井県三方上中郡から大飯郡にかけての地域に集中する。両墓制の分布と宗旨との関係も指摘されており、曹洞宗・臨済宗といった禅宗系宗派との関連が深い（佐藤 1977）。

民俗事例をみると、両墓制の分布域と土葬の分布域は大部分で重複し（福井県教委 1981）、両墓制の展開と土葬の普及には密接な関連があると考えられる。両墓制の成立時期は事例ごとに多様で、京都府京都市右京区（旧 京北町）では永正5（1508）年紀銘の宝篋印塔の存在から、中世末期にまでさかのぼることが指摘されている（竹田 1966・1968）。では、若狭において両墓制が成立するのはいつであろうか。

御嶽貞義は、山田中世墓群の検討を通じて、火葬骨の埋葬（中世墓）から石仏の設置（墓標遺構）へと墳墓造営の目的が漸次変化するものと考えた。そして、地表上に石仏を立て土坑内に火葬骨を納める形態をその過渡期として捉え、「詣り墓」的な墓標遺構の出現をもって、14世紀末～15世紀初頭には両墓制が成立したとする（御嶽 2004）。

先にみたように、両墓制の展開と土葬の普及には大きな関連がうかがえ、「詣り墓」に近い形態の墓地の出現をもって両墓制の成立と捉えることは、やや性急である。両墓制の成立背景に死者の汚れに対する観念の変化があったと考えると、「詣り墓」の造営と土葬の採用が両墓制の成立にとっての重要な要素となる。芳春寺山中世墓群の事例より、若狭では火葬と土葬が併存し、次第に土葬へと転換していくことを考慮すると、少なくとも両墓制の成立時期は16世紀初頭以後と考えられる。

3.まとめ

越前・若狭における近世墓のあり方は、対照的な様相であった。すなわち、越前では埋葬方法に火葬を採用し蔵骨器の使用例が認められるのに対し、若狭では土葬を主流に木棺および座棺に埋葬する事例が多い。その変遷は明確でないが、ほぼ近世を通じて近代にまで及ぶと考えられる。中世墓の事例をみると、若狭では16世紀代に土葬が定着し両墓制の萌芽も認められるため、この時期に墓制上の画期を設定できる。

一方、近世墓に表出される階層性の問題については、多賀谷左近墓所を除き墳墓の形態や墓標に明確な差異はない。また、副葬品は土師器皿と寛永通宝を基本とし、浜瀬遺跡第1号墓出土の5点の鉄製品に注目すると、集落の墓地内においてもある程度の階層差の存在が認められる。

今後、近世墓の事例が飛躍的に増加するとは考えにくく、近世墓地における石塔の変遷や民俗事例の検討を通じて、様相の把握に努めたい。

【引用・参考文献】

赤澤徳明 2006「福井県」『中世墓資料集成－北陸編－』中世墓資料集成研究会
金津町教育委員会 1995『金津町埋蔵文化財調査概要』
佐藤米司 1977『葬送儀礼の民俗』岩崎美術社
新谷尚紀 1991『両墓制と他界觀』吉川弘文館
竹田聰洲 1966「両墓制村落における詣墓の年輪（一）」『仏教大学研究紀要』49 仏教大学学会
竹田聰洲 1968「両墓制村落における詣墓の年輪（二）」『仏教大学研究紀要』52 仏教大学学会
田中照久 1989「福井県丹生郡清水町篠谷乗泉寺遺跡の陶器について」『福井考古学会会誌』第7号 福井考古学会
同志社大学文学部 1966『同志社大学文学部考古学調査報告第1冊 若狭大飯』
福井県 1984『福井県史』資料編15 民俗
福井県教育委員会 1975『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』No.6
福井県教育委員会 1981『福井県民俗分布図』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006『福井県埋蔵文化財調査報告 第92集 芳春寺山中世墓群』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書 第1集 坂ノ下遺跡群』
福井県鯖江市教育委員会 2000『鯖江市埋蔵文化財調査報告第2集 三峯村墓地跡』
福井県立若狭歴史民俗資料館 1987『日引遺跡』
福井市教育委員会 1997『福井城跡Ⅲ』
御嶽貞義 2004「大飯町山田中世墓群における両墓制の出現に関する予察」『北陸石造物研究会設立準備連絡誌』vol.1
北陸石造物研究会設立準備会
美浜町教育委員会 2007『美浜町埋蔵文化財調査報告第6集 美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

金沢城下の近世墓地

庄田 知充（金沢市埋蔵文化財センター）

1. はじめに

金沢城下町居住者の埋葬地は、城から南西に約3.5km離れた野田山墓地や、卯辰山麓・寺町・小立野および城下北部の寺院群等に分布する。本稿では、浅野川右岸の低湿地に位置する久昌寺旧境内墓地および、野田山中腹の加賀八家横山家墓所の調査事例を紹介する。

2. 久昌寺遺跡（金沢市 2004）

城下北東縁辺部の堀川町にある久昌寺（曹洞宗）は、慶長15年（1610）に二代藩主前田利長の正室玉泉院の生母の菩提所として本願寺東別院東南に建立された。当地に移転したのは17世紀中～後半とみられる。久昌寺を菩提寺とした藩士は、長瀬家（千石）を最高石高とする中・下級武士層だった。発掘調査では、近世～近代の292基の墓が検出された。

（1）埋葬施設の分類（第4図）

埋葬施設は、土葬の方形木棺（A類）・円形木棺（B類）・甕棺（C類）、火葬の蔵骨器（D類）に分類され（増山仁 1997）、A～C類は、さらに木郭の無（I類）・有（II類）で細分される。A類は長方形の板を釘打ちで組み箱形の棺としたもので、棺の外側に木製の「卍」を打ち付けたものがある。B類は結桶を棺としたもので、円形の蓋には「卍」や金剛經、「南無阿弥陀佛」、「迷故三界城」などの経文、桶側面に「前」・「後」・「一」などの文字が墨書きされている。C類は越前甕を棺としたもので、木製の円形蓋に「迷故三界城」と経文を墨書きした事例がある。D類は小型の越前甕・肥前甕・土師器壺・曲物を蔵骨器として埋納したもので、土師器皿や土製の蓋をかぶせている。

（2）埋葬施設の変遷（第2図）

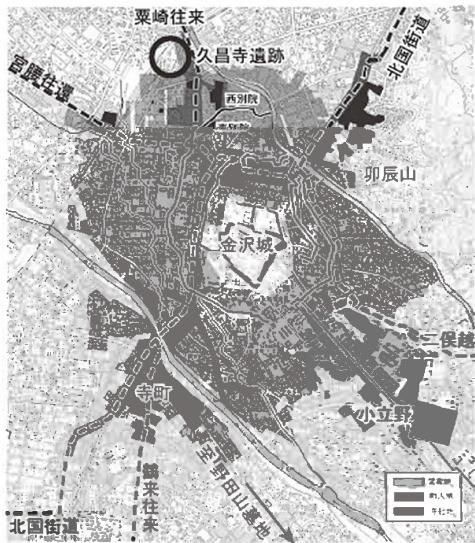
墓地は約1.5mの盛土を介して上層（17世紀後～18世紀代）と下層（18世紀末～19世紀初）に分離される。主体となる埋葬施設が下層では円形木棺や甕棺だが、上層では方形木棺となる。上層では甕棺墓も木郭に入れ、火葬墓も方形に区画するなど、平面形が円形から方形に変化する。

（4）副葬品と葬送儀礼（第3・5～10図）

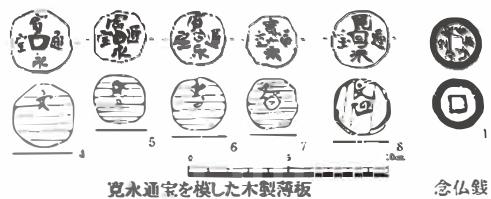
円形木棺墓や甕棺墓の副葬品は六道錢と数珠、漆器碗（3～4個一組）、箸の組合せが多く贋が加わるものがあり、量が多い。また、櫛、陶磁器碗、土人形、舟形の金属・土製品等もみられる。方形木棺墓では六道錢や土人形以外の副葬品が少なく、六道錢が省略される傾向もある。火葬墓では多くの場合副葬品がない。六道錢は円形木棺墓61%、甕棺墓59%、方形木棺墓16%、火葬墓6%と、古い墓ほど埋納率が高い。鉄錢、念佛錢、錢を模した木製品（表「寛永通宝」裏「文」の墨書き）が六道錢として埋納されることがある。時代を下るほど薄葬の傾向が強い。方形棺の蓋や底板に経文が鏡文字として転写していた事例がある。葬送儀礼に使用した柿経や棺飾りが共伴する事例もある。

（3）墓道と墓の配置

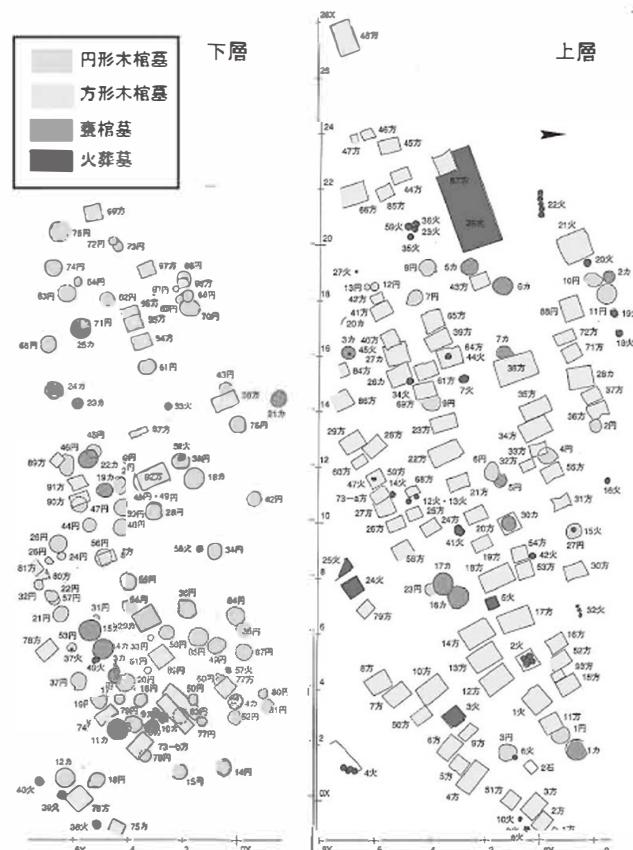
埋葬施設の配列から、墓道が存在していたと考えられる空間があり、その両側に墓が並ぶ。下層から上層への移行に際しては、基本的に同一場所で造墓が継続しており、墓域が継承されていると考えられる。上層墓地においては、下層で空白域だった北縁部に墓域が拡張することから、この時期に造墓需要が増加したと考えられる。当時は土葬を基本とする個人墓だったことから追葬スペースが不足し、新たに盛土を行うことで垂直方向に造墓スペースを確保したと考えられる。



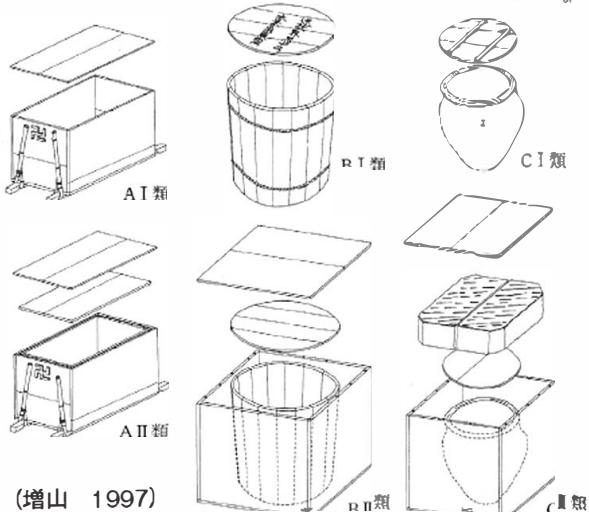
第1図 延宝期の城下と遺跡の位置



第3図 六道銭の特殊な例

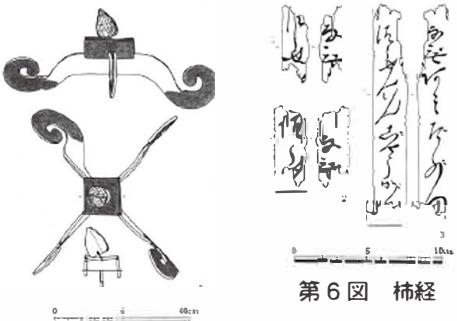


第2図 久昌寺遺跡 遺構配置図



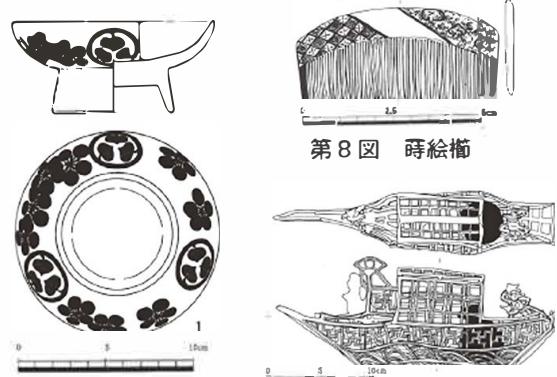
(増山 1997)

第4図 埋葬施設（土葬墓）の分類



第6図 柿経

第5図 棺飾り

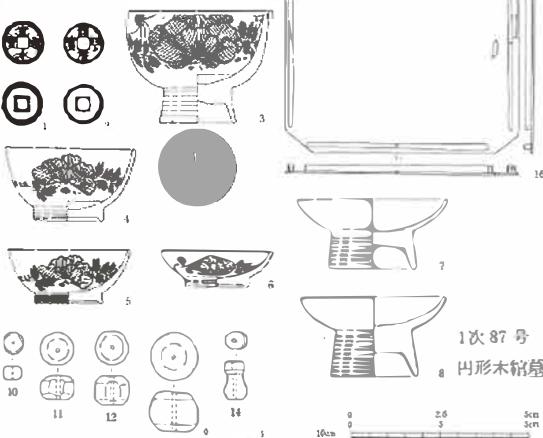


第8図 時絵櫛



第7図 時絵腰高

第9図 舟形の鈴（金属製）



第10図 副葬品の組み合わせの一例

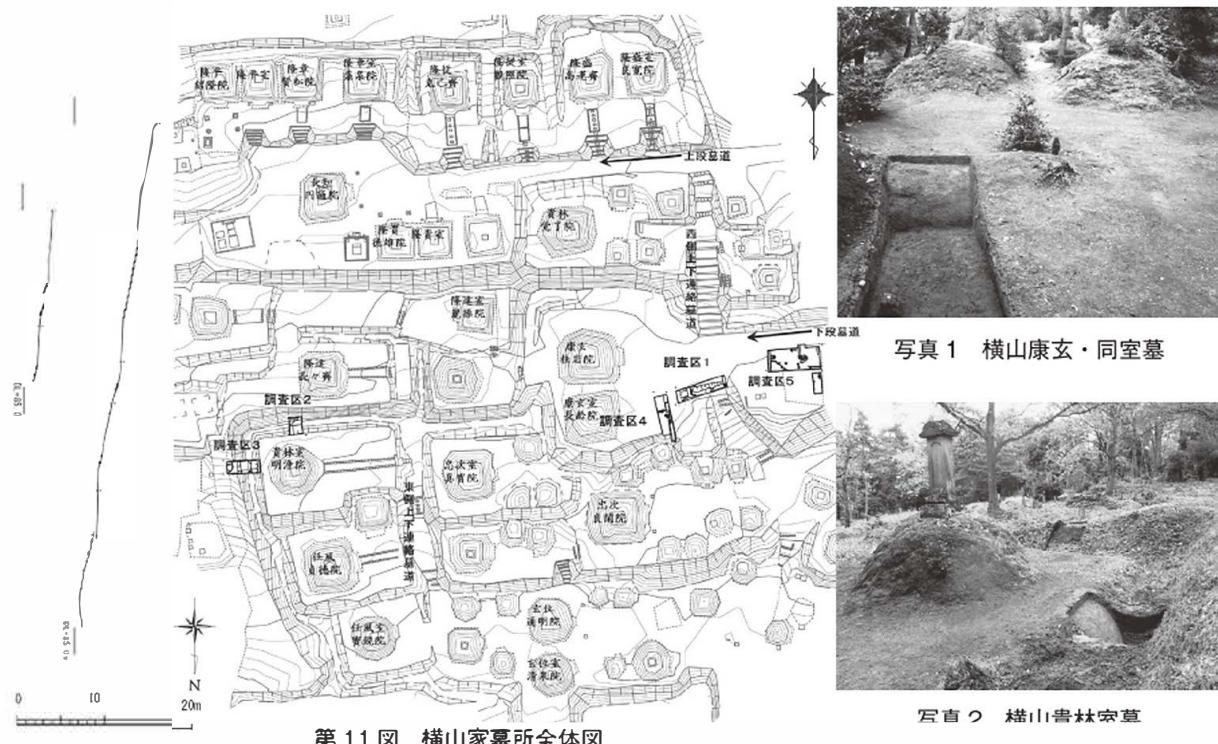
3. 加賀八家横山家墓所（金沢市 2012）

横山家は元禄3年（1690）以降、代々世襲で藩の執政を担当した年寄衆の家柄（加賀八家）のひとつで、3万石を禄し、歴代当主の内3名が金沢城代を勤めるなど藩政に重要な役割を果たした。墓所は野田山墓地の中腹にあり、2代長知から13代までの当主・室、子女が葬られている。

発掘調査は、横山家墓所内の康玄〔正保二年（1645）没〕墓およびその室〔明暦元年（1655）没〕墓と貴林室〔五代任風娘・〔正徳五年（1715）没〕墓の基壇・周溝および横山家所蔵の絵図に「御帳附小屋」と記載される平坦面で実施した。

康玄・同室墓では、東西約16m、南北約17mの長方形基壇の後方において、康玄墓と同室墓の墳丘を南北に併置している。墳丘は約6m四方の方墳の上に円墳をのせた二段築造とし、墳丘前面裾部には方形の張り出しが設けられている。康玄・同室墓ともに墓石は見られない。康玄は、没年から本墓所における最初の埋葬者と考えられ、野田山参道から横山家墓所に至る主要墓道である下段墓道の正面突き当たりに築造されている（ちなみに上段墓道正面突き当たりは、康玄の父2代長知墓となっている）。貴林室墓では、東西約15m、南北約9mの長方形基壇の後方に、約6m四方の平面形が崩れた方墳を配置している。ともに基壇の三辺（山側・前面・背面）に区画溝がある。上下方向の区画溝は各墓で独立しておらず縦に連続していることから、区画溝は、各墳墓および墓所全体の境界としての役割のほか、排水の機能を併せ持っていると考えられる。

御帳附小屋跡では明確な建物痕跡を確認できなかった。建物構造は検討課題だが、主要墓道の墓所入口脇の空閑地であることから、葬礼または墓参祭祝に関わる臨時施設のための用地と考えられる。



第11図 横山家墓所全体図

【参考図書】

石川県図書館協会 1974『加越能寺社由来 上巻』

金沢市 2004『久昌寺遺跡』／金沢市 2012『野田山・加賀八家墓所調査報告書』

増山仁 1997「金沢城下における近世墓－久昌寺墓地を中心として－」『西日本近世墓の様相』関西近世考古学研究会

石川県における近世墓

和田 龍介（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

石川県では、約40箇所の近世墓及び関連遺構が確認されており（平成25年度現在、第1表）、本稿では石川県下の近世墓の発掘調査事例を、①寺院境内墓地、②農村部墓地に分けて紹介していく（野田山墓地及び庄田氏発表分を除く）。

1. 寺院境内墓地

金沢市経王寺遺跡、同宝町遺跡、同木ノ新保遺跡（久昌寺遺跡）、同金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）、珠洲市金峰寺墓地、同だいじょう寺畠遺跡がある。

経王子遺跡・宝町遺跡（金沢市小立野・宝町、第1図）

日蓮宗経王寺の旧墓地跡にあたる。加賀藩第3代藩主前田利常の生母寿福院により慶長10（1605）年に開かれ、寿福院と利常の庇護を受けた寺院である。平成9年に（財）石川県埋蔵文化財センターが実施した経王寺遺跡の発掘調査では、11基の墓坑と1基の灰塚（茶毘遺構群）が検出されている。

金峰寺墓地（珠洲市若山町、第1図）

曹洞宗金峰寺の墓地改修に伴い、珠洲市教育委員会が平成8年に発掘調査を実施した。寺は暦応元（1338）年開創と伝わり、歴代住職の墓域から5基の近世墓が検出された。長方形の板石で区画された墓域内に蔵骨器を埋設しており、肥前系陶器甕・土師質甕の蔵骨器が出土する。

金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市東兼六町、第2・3図）

曹洞宗鶴林寺・雲竜寺の旧墓地跡であり、小立野台地東側の段丘崖を造成して営まれたものである。（公財）石川県埋蔵文化財センターが平成25・26年度に発掘調査を実施した。江戸時代中期以降に営まれた調査面では、越前焼甕を用いた甕棺（約30基）と、長方形棺の木棺（約40基）を検出した。火葬蔵骨器は、肥前系陶器甕に納められたものが数基確認できる。甕棺はすべて越前焼の大甕が用いられ、19世紀前半代のものが中心で、一部17世紀後半に遡るものもある。棺内には土人形・寛永通宝（六道銭）などが入る。木棺はほとんどが長方形棺で、座棺と考えられる。側板まで検出できたものでは、高さが約70cmであった。大半は鉄釘で造作されていたが、竹釘で造作されているものもあった。棺内副葬品は土人形をはじめ甕棺よりも多い印象がある。煙草盆が納められているものもあった。

木ノ新保遺跡（金沢市木ノ新保、第4図）

金沢城下町の北西端に位置し、墓域は絵図に残る屋敷割以前の、17世紀前半代に営まれていた。報告では、寺院境内墓地の可能性を指摘している。埋葬遺構は土葬墓20基、火葬墓7基、葬具埋納土坑1基が検出された。土葬墓は早桶（結桶・酒樽・曲物転用品含む）が19基、長方形棺（転用品？）1基である。

2. 農村部墓地

多様性があると考えられ、一律にこのカテゴリへ収めるべきかどうかという問題もある。現在のところ、墓域として発掘調査でおさえられているのは白山市乾遺跡（上層遺構）のみで、単独検出の近世墓は総覧できていない。また火葬遺構に付属する近世墓としては、加賀市敷地天神山遺跡、金沢市額谷遺跡、能登町上町和住下遺跡で検出例がある。

乾遺跡（白山市乾町）

手取扇状地の扇央部に位置する集落遺跡である。墓域は国道8号にほど近いB区で確認され、15世紀台から17世紀前半代まで営まれた168基の土坑群が墓坑である可能性が示された。埋葬施設や

上部構造等はまったく残っておらず埋葬形態は不明だが、土坑底面付近に礫原のような集石を持つものが多く見られる（石・坑内に被熱状況は見られない）。

直江ボンノシロ遺跡（金沢市直江町、第4図）

金沢市の北西部の後背湿地に営まれた遺跡で、区画整理事業によって移転した集落墓地の一部が調査対象地に含まれており、合計12基の近世土葬墓が検出された。年代のわかるものについては18世紀以降の所産と考えられる。「鍋被り葬」が2基確認された。

3. 石川県の近世墓

①城下町と農村

大名墓地を除き、石川県で発掘調査に至った近世墓は13遺跡を数える。うち城下町は5遺跡、農村は6遺跡、寺院境内2遺跡である。城下町の近世墓地はいずれも寺院境内墓地であり、城下町墓地の普遍性をうかがうことは難しいかもしれない。金沢城下町の都市墓といえる野田山墓地は、藩主から町民まで様々な階層の墓地を含んでおり、その形成過程や詣墓（家老・人持等上級武士層に見ることができる）など、城下の墓制を考える上で重要な墓地である。

一方で農村墓地は、火葬場+墓地というパターンと、墓地のみが検出されるパターン、火葬墓のみの3パターンが存在することが予測できる。これは火葬と土葬という葬法による差異を反映するものといえ、火葬を通有とする浄土真宗の地域的あり方との関連性が今後の課題といえる。

②寺院境内墓地における埋葬施設の変遷

17世紀前半：早桶主体（木ノ新保遺跡）

17世紀後半～18世紀：早桶主体、木棺が定量用いられる（久昌寺遺跡）。17世紀末までには越前焼甕棺が用いられ始める（野田山墓地、兼六町5番地区）。

19世紀～：木棺主体、早桶激減（久昌寺遺跡）、甕棺は選択的に用いられるか。

火葬墓は有機質容器（曲物等）と蔵骨器、容器なしの3通りが確認できるが、変遷等は不明である。火葬そのものは17世紀前半にすでに認められ、19世紀段階では増加する傾向も見られるが、依然主体は土葬と考えられる。

城下町寺院境内墓地における甕棺は近世を通じて越前焼が用いられているのが特徴である。火葬蔵骨器については越前焼の他に、肥前系陶器甕を用いているものもある。土師質系の蔵骨器については、年代の特定が難しく、今後の課題としたい。

【参考文献】

江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』（吉川弘文館 2004）

佐藤弘夫『死者のゆくえ』（岩田書院 2008）

谷川章雄「江戸の墓制・葬制の考古学的研究」（早稲田大学学位論文（博士）2010）

柿田祐司・田村昌宏・滝川重徳「九泉」（財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報 創刊号』1999）

同「九泉Ⅱ」（財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報 2号』2000）

同「九泉Ⅲ」（財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報 3号』2001）

増山仁「金沢城下における近世墓－久昌寺墓地を中心として－」（関西近世考古学研究会『西日本近世墓の諸様相 第9回関西近世考古学研究大会発表要旨』1997）

石川県立埋蔵文化財センター『敷地天神山遺跡』1987

同『金沢市額谷遺跡』1998

（財）石川県埋蔵文化財センター『金沢市 経王寺遺跡』2002

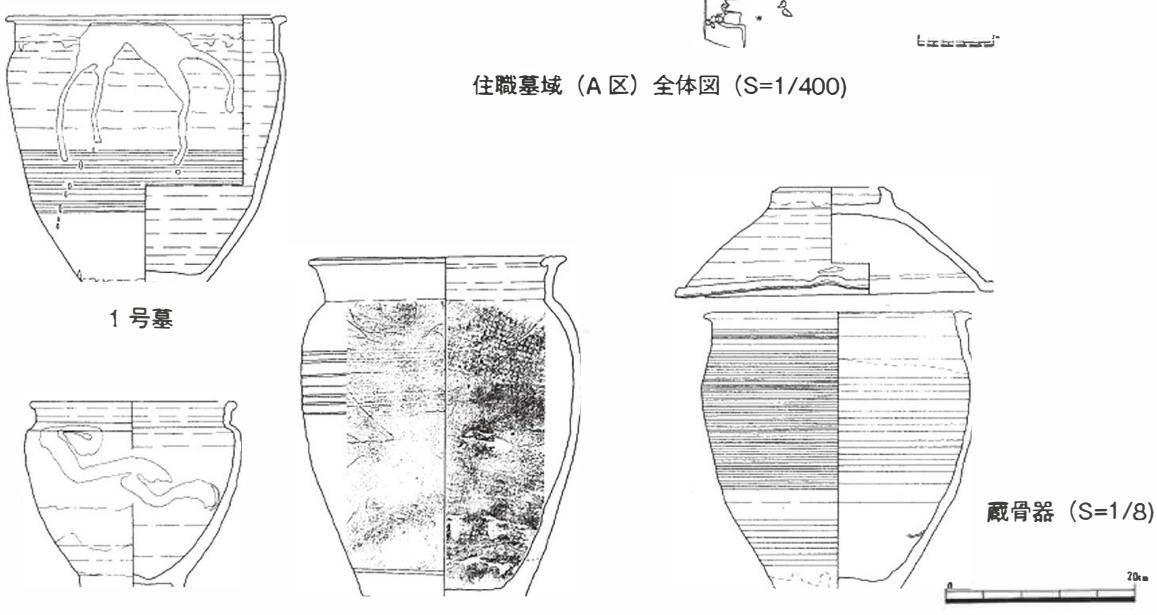
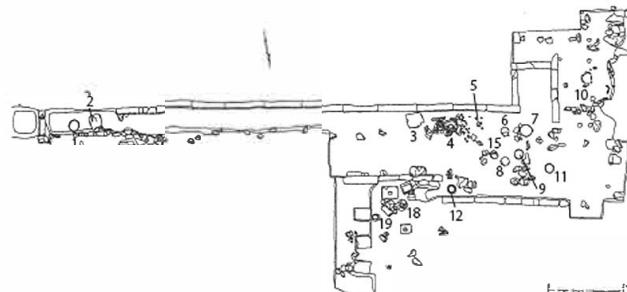
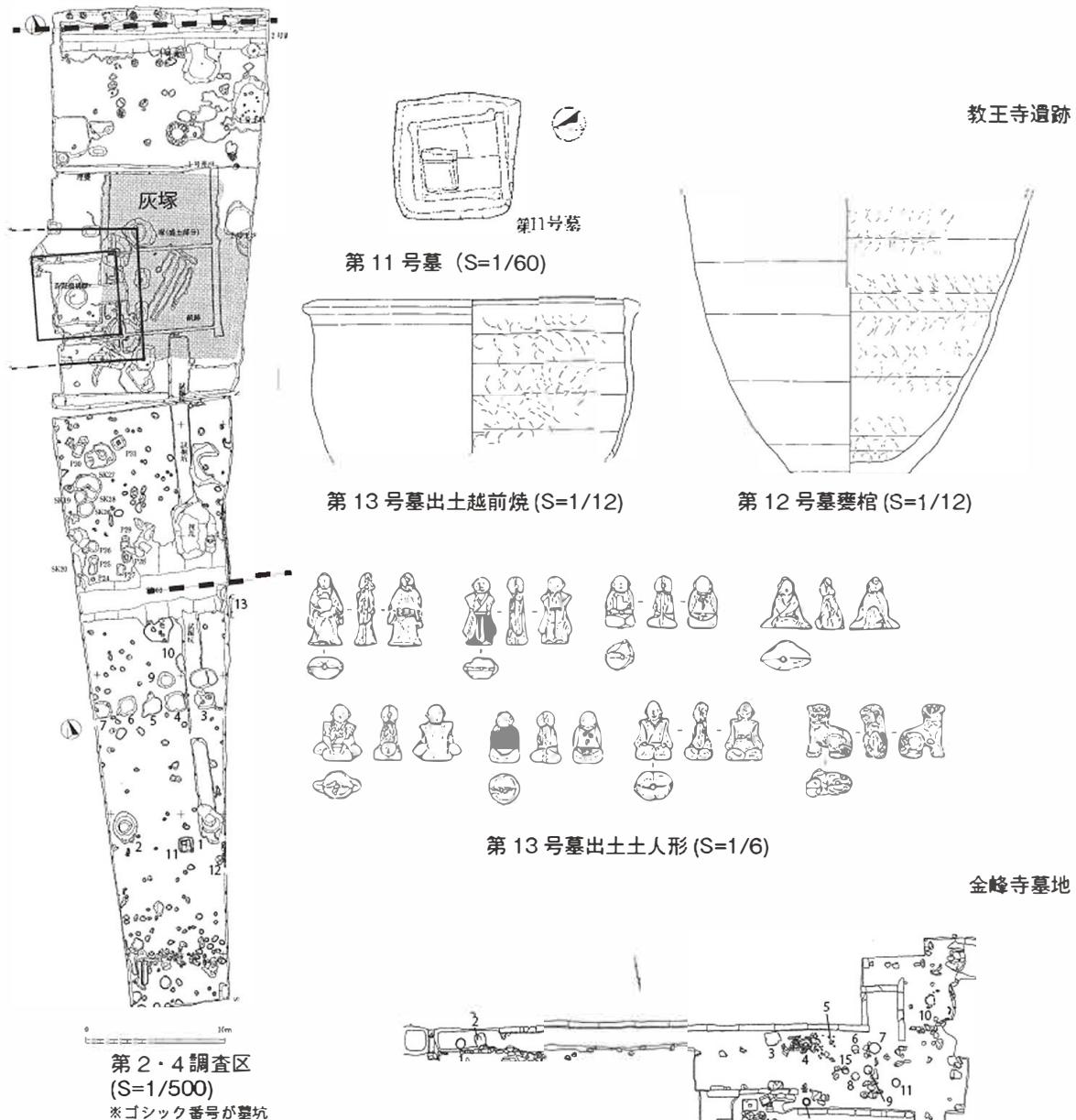
同『金沢市 木ノ新保遺跡』2002

同『珠洲市 だいじょう寺畠遺跡』2005

同『白山市 乾遺跡』2010

金沢市『野田山墓地』2003

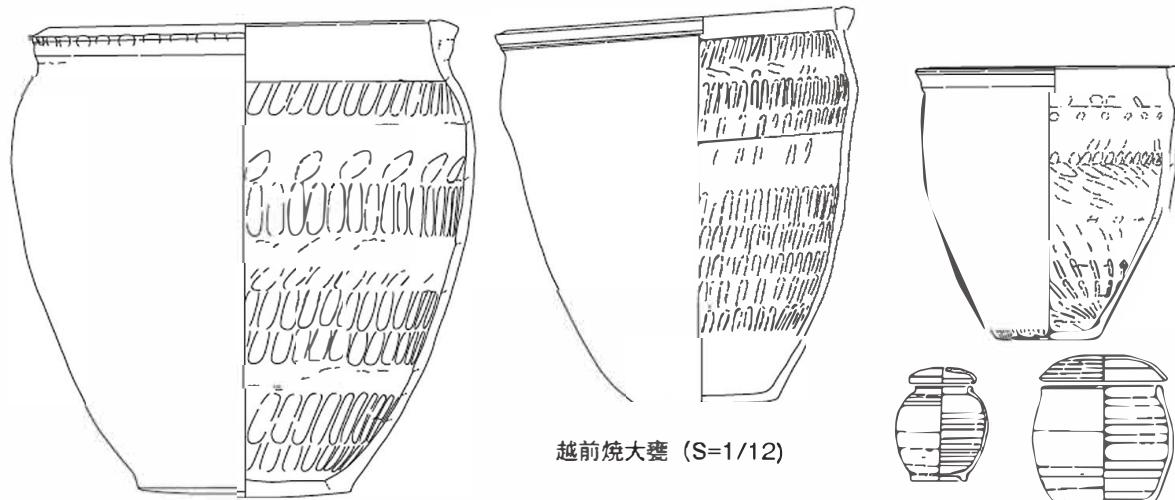
同『石川県金沢市 直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』2012



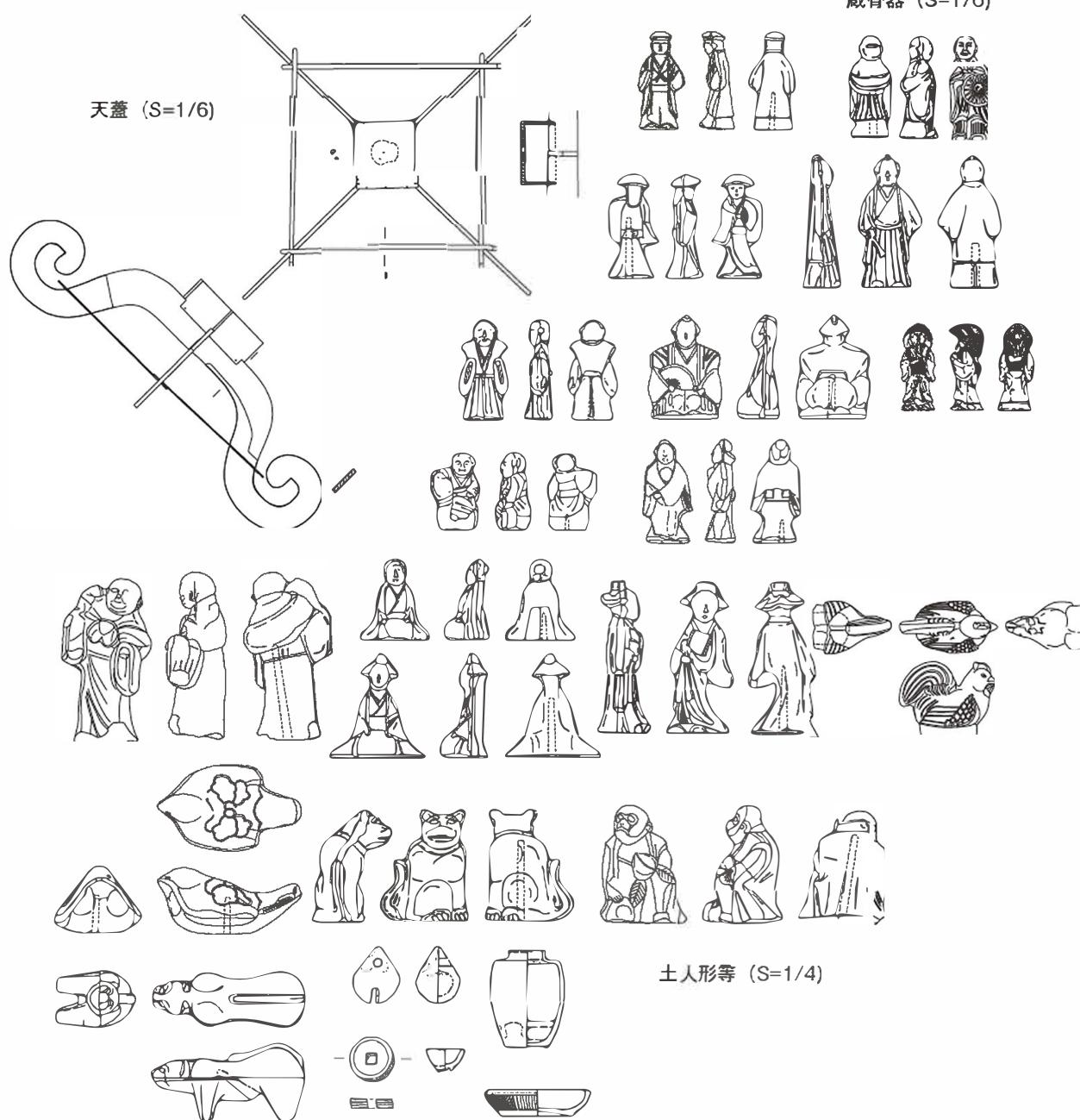
第1図 経王寺遺跡、金峰寺墓地



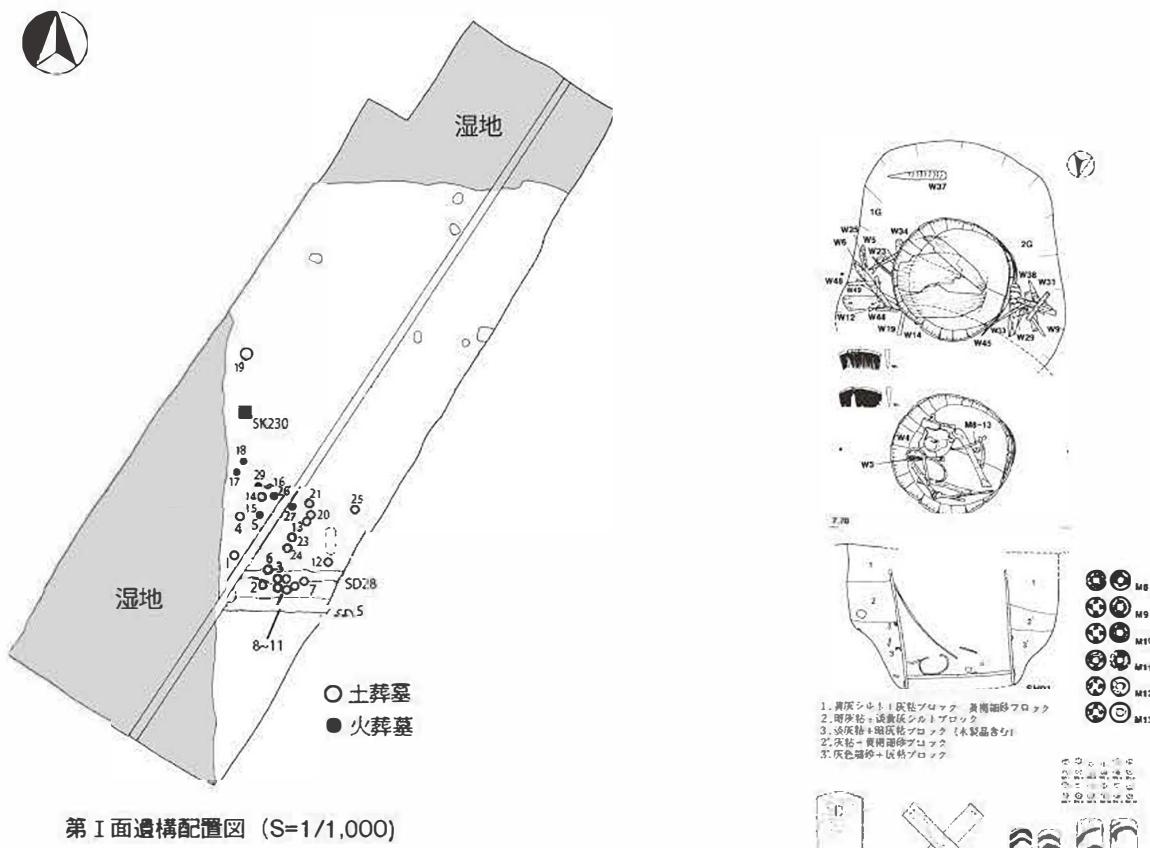
第2図 金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）鶴林寺調査区



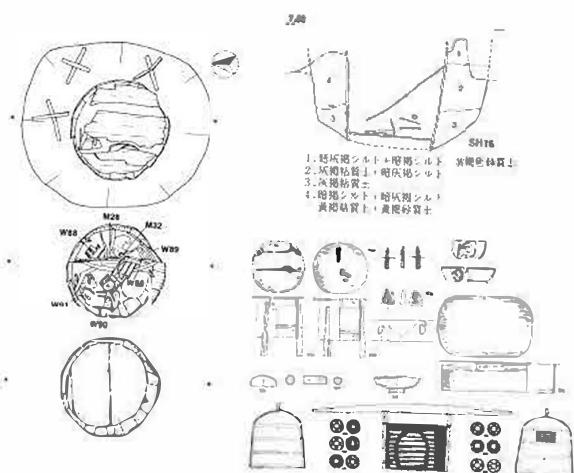
戚骨器 (S=1/6)



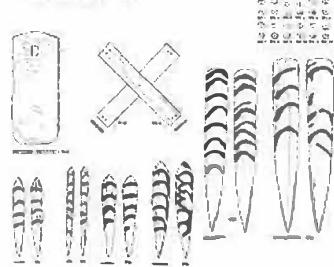
第3図 金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）出土遺物



第Ⅰ面造構配置図 (S=1/1,000)



SH016 (遺構 1/40、遺物は任意)



SH01 (遺構 1/40、遺物は任意)



直江ボンノシロ遺跡

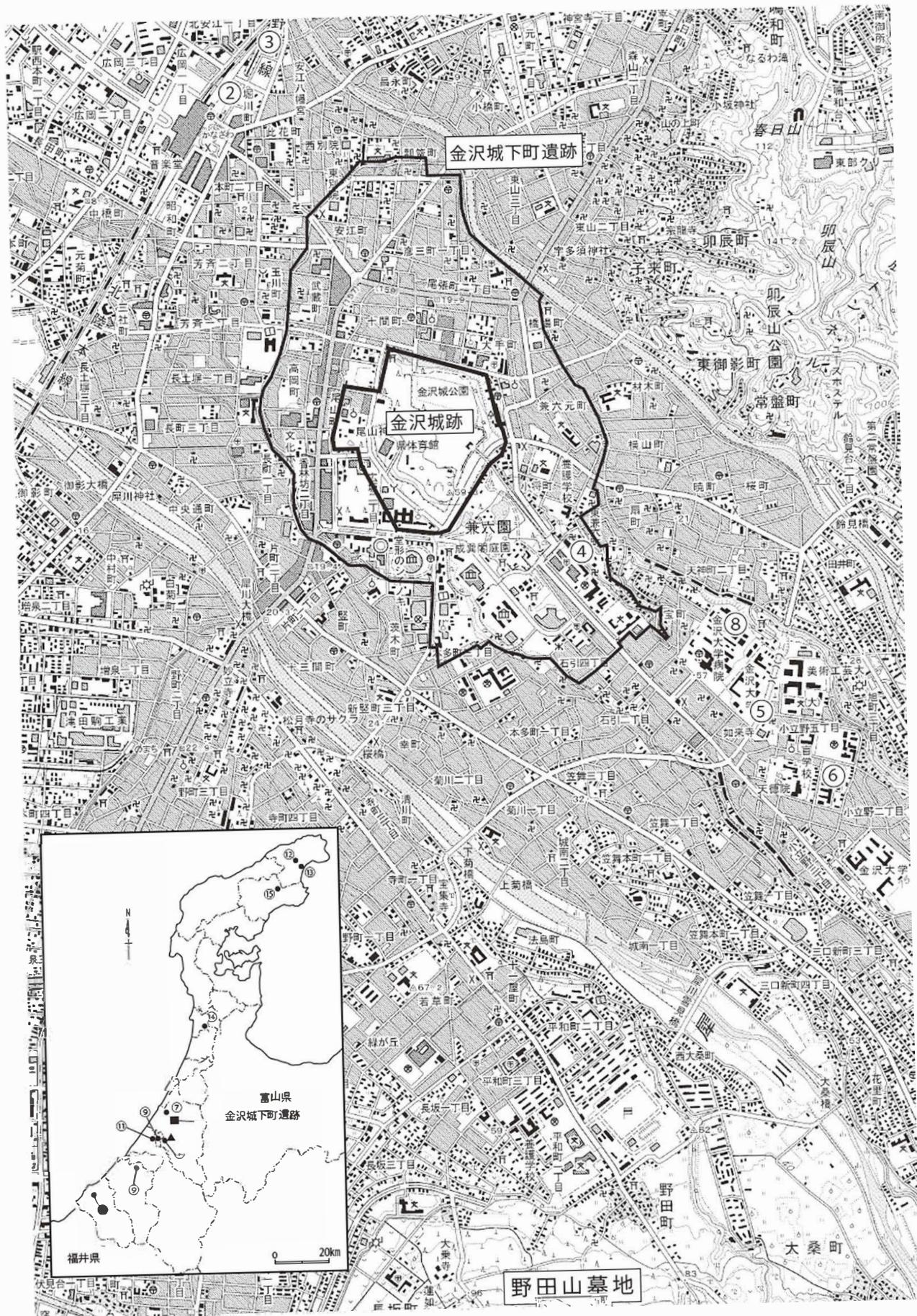


第4圖 本／新保邊緣／南江支／江口邊緣

第1表 石川県の近世墓遺跡一覧

	遺跡番号	遺跡名	市町名	所在地-詳細	年代	火葬遺構	土葬墓	火葬墓	発掘調査等履歴	備考
		野田山墓地	金沢市	野田町	17世紀～	?	○	○	2001年度市立会調査、2004～2011年度市確認調査（前田家・加賀八家墓所）	金沢城下町の都市墓。加賀藩主墓所以降、18世紀には家臣墓・町人墓が形成されていく
①	104700	額谷遺跡	金沢市	額谷町	19世紀～	1	0	2	1995年度県（埋文七）発掘調査、1998・2000年度県（財埋）発掘調査	幕末以降の火葬場及び付属の火葬墓
②	129001	木の新保遺跡	金沢市	木ノ新保・堀川町・北安江	17世紀前半	0	20	7	1993年度県（埋文七）	寺院境内墓地か
③	129002	木ノ新保遺跡	金沢市	木ノ新保、堀川町、北安江	17世紀後半～	0	209	30	94～97年度市発掘調査	旧「久昌寺遺跡」、寺院境内墓地2面の墓地遺構を確認
④		金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）	金沢市	東兼六町	17世紀後半～	0	○	○	2013～14年度県（埋文七）	寺院境内墓地
⑤	132000	経王寺遺跡	金沢市	小立野・宝町	17世紀～	1	1	9	1997年度県（埋文七）・1998年度県（財埋）発掘調査	旧経王寺墓地、火葬遺構は藩主一族クラスの豪華な火葬墓
⑥	132100	小立野四丁目遺跡	金沢市	小立野・宝町	17世紀中葉			○	2010年度市発掘調査	旧天徳院前田家墓地、4代藩主光高墓。野田山へ移転
⑦	144100	直江ポンソシロ遺跡	金沢市	直江町	18世紀～	0	6	0	2009・10年度市発掘調査	農村墓地、鍋葬2基
⑧	158300	宝町遺跡	金沢市	宝町			○	?	1997～2002・04～06・08・09・11年度その他（金沢大学）発掘調査	旧経王寺墓地
⑨	1202005	三日市A遺跡	野々市市	三日市町・二日市町	近世前半	0	4	0	2001～10年度町、11年度市、06・07年度県（財埋）発掘調査	15世紀末の火葬墓17基、近世墓4基のうち3基は鍋葬
	307100	前田利常公灰塚	小松市	河田町		1	0	0	1990年度県（埋文七）発掘調査	1658年前田利常没後茶毎に付された火葬跡地。遺骨は高野山天徳院に納められる
⑩	611300	敷地天神山遺跡	加賀市	大聖寺岡町・敷地	18世紀～	1	0	10	1979～82年度県（埋文七）、1981年度市発掘調査	石組み火葬炉
	641200	四ツ墓	加賀市	大聖寺地方町						
⑪	904500	乾遺跡	白山市	乾町	17世紀前半～中頃		?	?	1990～91年度県（埋保）、92年度市発掘調査	15世紀代から継続する墓坑群。火葬か
	262500	熊沢折形中世墓群	七尾市	熊沢町						2003年度県教委分布調査
⑫	506100	だいじょう寺畠遺跡	珠洲市	若山町大坊	中世後半～近世	○	○	○	2001年度県（財埋）発掘調査	住職墓域を検出
	506200	だいじょう寺跡	珠洲市	若山町大坊						
	506300	小龍寺跡	珠洲市	若山町宇都山						
	513500	正院館薬師遺跡	珠洲市	正院町正院					1989～99年度市分布調査	
	516902	大宮司畠中世墓	珠洲市	三崎町粟津					1989～99年度市分布調査	
	518802	寺家谷墓地	珠洲市	宝立町春日野						
	519002	日枝神社横遺跡	珠洲市	宝立町柏原					1989～99年度市分布調査	
⑬	519702	金峰寺墓地	珠洲市	宝立町金峰寺	17世紀後半～	0	0	5	1996年度市確認調査	住職墓を調査
	520202	海月庵墓地	珠洲市	真浦町					1989～99年度市分布調査	
	520302	友貞家墓地	珠洲市	仁江町					1989～99年度市分布調査	
	521602	曹源寺墓地	珠洲市	長橋町					1989～99年度市分布調査	
	521902	未光家墓地	珠洲市	長橋町						
	522202	頼兼墓地	珠洲市	大谷町					1989～99年度市分布調査	2ヶ所に分かれている
	523702	頼成寺墓地	珠洲市	若山町延武					1989～99年度市分布調査	石列方形区画
	524002	昌樹寺墓地	珠洲市	若山町古蔵					1989～99年度市分布調査	
	524502	高照寺墓地	珠洲市	上戸町寺社					1989～99年度市分布調査、2002年度県（財埋）発掘調査	調査では墓域は確認できず
	525702	野々江城山墓地	珠洲市	野々江町					1989～99年度市分布調査	
	526105	正院ショウズ遺跡	珠洲市	正院町正院					2001年度市試掘調査	
	527302	尋江院墓地	珠洲市	三崎町粟津					1989～99年度市分布調査	
	527702	寺家安養寺遺跡	珠洲市	三崎町寺家					1989～99年度市分布調査	高勝寺（廃寺）僧侶他の墓地
	528302	守禪庵墓地	珠洲市	馬縄町					1989～99年度市分布調査	
	529404	狼煙寺屋敷遺跡	珠洲市	狼煙町					1989～99年度市分布調査	
	532000	旧大矢家墓地	珠洲市	熊谷町					1989～99年度市分布調査	五輪塔残欠
⑭	712700	太田B遺跡	羽咋市	太田町	近世	1	0	0	2003～05年度県（財埋）発掘調査	三昧の片付け跡か
	1801500	地蔵堂中世墓地	穴水町	志ヶ浦						毎年10月15日に地蔵供養
	1819700	小又和泉墓	穴水町	小又						
	1819800	小伊勢坂墓	穴水町	平野						
	1919100	宮犬墳墓群	能登町	宮犬						径1～3m、高さ0.5～1m、円墳6基以上
⑮	1911200	上町和住下遺跡	能登町	上町	17世紀後半～	1	0	10	1993・94年度県（埋文七）発掘調査	火葬人骨

※出典「石川県遺跡・文化財地図」(平成25年度版)。「時代」に近世、「遺構種別」に墓があるものを拾った。火葬遺構(三昧等)については、近世墓関連遺構として捕つた。



第5図 石川県・金沢城下近世墓位置図 (S=1/1,000,000、25,000)

富山県における江戸時代の墓

田上 和彦（高岡市教育委員会）

はじめに

富山県において江戸時代の墓は、遺跡の分布調査で報告されているが具体的な調査事例は少ない。しかし、近年加賀藩前田家二代前田利長の墓所や富山藩主前田家墓所、岩崎寺の石造物等の調査報告（高岡市教育委員会 2008、古川ほか 2010、立山町教育委員会 2012）などから資料の蓄積がなされてきた。富山県においては大名墓、衆徒墓地、その他の 3 つに大別されるのでそれぞれの事例を挙げ、今後の課題を把握したい。

大名墓

富山県における大名墓は、国指定史跡加賀藩主前田家墓所（前田利長墓所）と富山藩主前田家墓所長岡廟所である。

高岡市教育委員会は平成 18 年度から平成 19 年度の 2 カ年にわたり前田利長墓所の詳細調査を実施し、金沢市の野田山墓地との比較を行っている（栗山 2010、2013）。共通性は①墓域形態は野田山前田家墓所墳墓変遷Ⅰ期新相に該当し、造営年とも整合、②墳墓の基本構造は、土盛り整形の方形墳墓、③歴代藩主墓と同様に初代利家墓を上回らない規模で造営という 3 点が挙げられる。富山藩主前田家墓所は、富山城の北西にある長岡地区に所在し、長岡御廟所と呼ばれている。

富山市埋蔵文化財センターは、基礎調査を実施し加賀藩主墓との比較を行っている。長岡御廟所の造営は野田山Ⅱ期にあたるが、墓域・墓の位置はⅡ期には合致せずむしろⅠ期古相のあり方に近い。墳丘・墓の形式は外観、規模ともに大きく異なるが、盛土による方形墳丘や三段築成であることは類似する。加賀藩主墓の造墓原理が及んでいない要素があることから、墓の様式や、藩主とその他人物との差別化などの考え方を断片的に取り入れながら、富山藩独自の墓所造営を行ったのが実態ではないかと考えられる。

以上から、金沢市の加賀藩主墓所と高岡市の前田利長墓所を比較すると造墓原理を共通認識していることがわかる。しかし、加賀藩主墓所と富山藩主墓所と比較すると富山藩独自のものを構築したことが考えられる。

衆徒墓地

衆徒墓地は、富山県立山町の岩崎寺と芦崎寺にある。岩崎寺については、立山町教育委員会が平成 21 年から平成 23 年度にかけて石造物の悉皆調査を実施した。調査で確認した石造物は約 1,500 点にのぼり、中世から近代にいたる地域の造墓活動を詳細に記録した。芦崎寺については平成 2 年（1990）から平成 4 年（1992）に立山中宮寺跡における石造物の分布状況を調査したものである。

衆徒墓地では、被葬者とその石造物については差別化がみられることが石造物から読み解くことができる。僧侶以外にも村落を構成している成人や子供たちも埋葬されるようになる。宗教村落ということで、一般的な集落と性格が異なるのかもしれないが、集落の墓域形成の形を把握できたことは重要である。

その他の墓地

その他の墓地として、高岡市移田野塚遺跡（高岡市教育委員会 1993）、富山市正西寺墓地跡（富山市教育委員会 2014）、富山市日俣地先近世墓地跡、本郷島地先近世墓地跡（富山市教育委員会 2014）、魚津市印田近世墓（魚津市教育委員会 1993）、黒部市堀切遺跡 H 区の塚（石田の石塔群遺跡）（黒部

市教育委員会 2012)、北堀切遺跡Ⅶ区の塚（黒部市教育委員会 2011）が挙げられる。その他の墓地では蔵骨器が出土しており、富山市正西寺墓地跡、日俣地先近世墓地跡、本郷島地先近世墓地、魚津市印田近世墓では蔵骨器の形が良く類似しており、火葬や素焼の皿で蓋をすることなどが共通する。堀切遺跡 H 区の塚では桶の中に成人女性が埋葬されている状況が確認されている。

今後の課題と展望

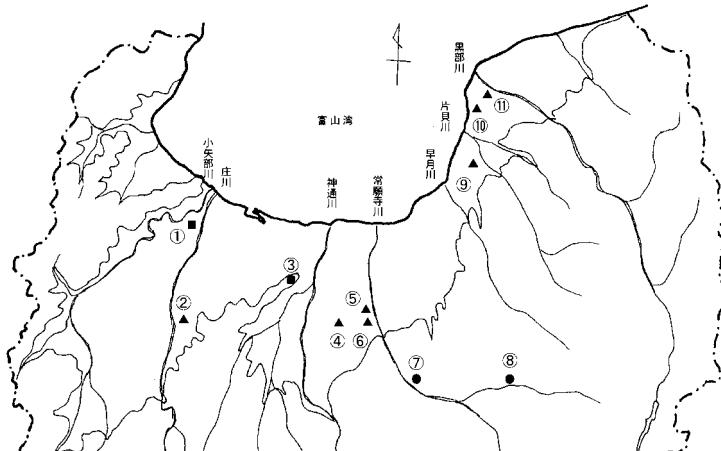
富山県内の江戸時代の墓については、把握していない遺跡や成果があると考えられ、それらを丹念に集成することが必要である。

また、単一で検出された近世墓に関しては集落遺跡と関連させて考えて位置づける必要がある。今後、地域ごとの実態が明らかになるように努力したい。

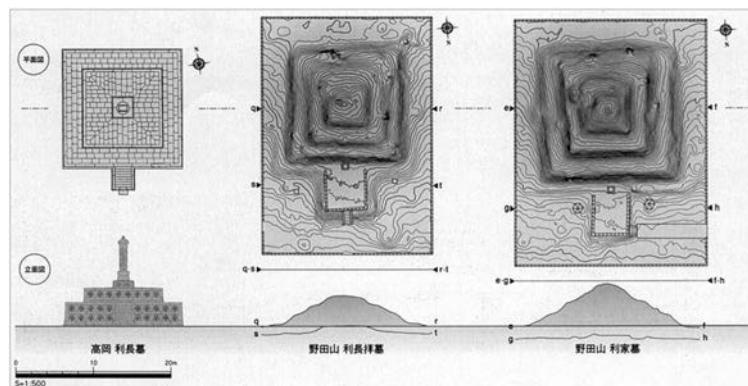
【引用参考文献】

魚津市教育委員会 1981 『富山県魚津市印田近世墓－発掘調査報告書－』
栗山雅夫 2010 「3 加賀藩主前田家墓所における造墓原理」『立正大学考古学フォーラム 近世大名家墓所調査の現状と課題』
栗山雅夫 2013 「お墓から読み解く前田利長公」『平成 25 年高岡市立博物館郷土学習講座資料』
黒部市教育委員会 2011 『北堀切遺跡Ⅶ区の塚発掘調査報告書－国道 8 号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査－』
黒部市教育委員会 2012 『堀切遺跡 H 区の塚（石田の石塔群遺跡）発掘調査報告書－国道 8 号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査』
高岡市教育委員会 1993 『移田野塚遺跡調査概報－平成 4 年度、中田土地区画整理事業に伴う調査－』
高岡市教育委員会 2008 『高岡市前田利長墓所調査報告』
高岡市教育委員会 2011 『国指定史跡 加賀藩主前田家墓所（前田利長墓所）保存管理計画書』
高岡市教育委員会 2012 『国指定史跡 加賀藩主前田家墓所（前田利長墓所）整備基本計画書』
立山町教育委員会 2012 『立山信仰宗教村落－岩嶋寺－石造物等調査報告書』
富山県〔立山博物館〕 1993 『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』
富山市教育委員会 2014 「II 近世墓地の調査」『富山市内遺跡発掘調査概要 X Ⅲ』
古川知明・野垣好史・小林高太 2010 「富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告」『富山市考古資料館紀要』第 29 号
間野 達 2013 「岩嶋寺の石造物と立山信仰」『平成 25 年度越中史檀会研究発表大会要旨』

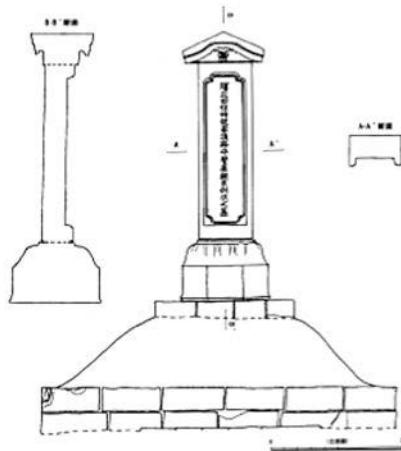
- ① 高岡市 前田利長墓所
- ② 高岡市 移田野塚遺跡
- ③ 富山市 長岡御廟所
- ④ 富山市 正西寺墓地跡
- ⑤ 富山市 日俣地先近世墓地跡
- ⑥ 富山市 本郷島地先近世墓地跡
- ⑦ 立山町 岩峠寺衆徒墓地
- ⑧ 立山町 芦峠寺衆徒墓地
- ⑨ 魚津市 印田近世墓
- ⑩ 黒部市 堀切遺跡 H 区の塚
(石田の石塔群遺跡)
- ⑪ 黒部市 北堀切Ⅶ区の塚



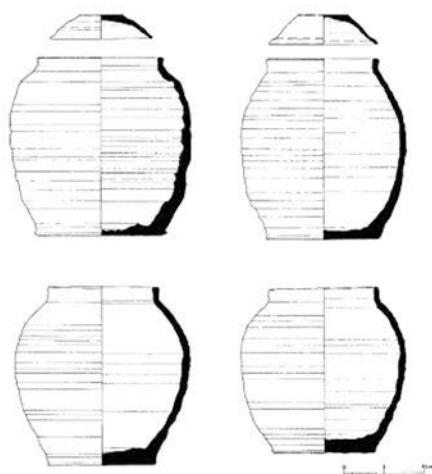
第1図 富山県における江戸時代の墓分布図



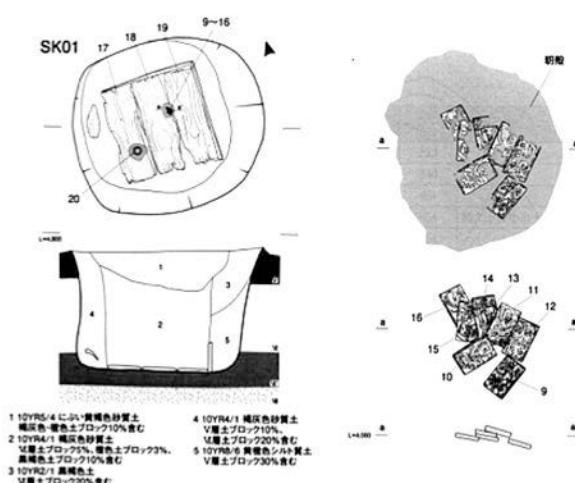
第2図 利家・利長墓 墳墓規模比較図



第3図初代利次墓側面立面図



第4図 印田近世墓 藏骨器室測図



第5図 北堀切遺跡VII区の塚 一分金検出状況

新潟県における江戸時代の墓

相羽 重徳（佐渡市世界遺産推進課）

発掘調査された近世墓

新潟県内で2009年段階において発掘・報告された近世墓は、40遺跡で792基ある。そのうち火葬墓は332基で、土葬墓は460基である（第1図）[相羽2009]。現況では、土葬墓は県北（阿賀野川以北）と県南（魚沼地域）及び山間部に多く分布する。一方、火葬墓は県北を除く平野部に多く分布し、特に新潟市周辺（新潟平野）が大半を占める。佐渡では調査事例が少なく、大勢はよく分からぬ。

本県の場合、開発に伴う緊急調査がほとんどである。つまり、開発が盛んに行われない地域においては、調査が及んでいないという分布論的課題がある。また、現代まで継続して残る墓地で、墓標があり被葬者ないしは所有者が判然としている場合、人道的観点から調査は行わず、改葬する場合がほとんどであるし、開発の対象となることは少ない。逆に言えば、発掘調査で見つかっている近世墓については、①学術調査、②墓標などが存在せず所有者が不明、③そこに埋葬地が存在することすら忘れられ、調査時に不時発見されたもの、などが多い。よって、検出された墓坑は必然的に墓地全体のほんの一部であったり、単発的な検出例が多くなる。そのため、墓域あるいは葬制の全容が詳らかとならず、畢竟、被葬者についての情報は極めて限られる。本県のこうした情報の欠落は、履歴の明らかな寺域や墓域の調査がほとんど及んでいないことにも起因している。

関連諸分野からみた近世火葬墓の分布

死者の葬法選択に当たって、火葬と浄土真宗及び地理的環境が密接な関係性を持つということは既に多くの先学により指摘されている。例えば民俗学では、井之口章次氏が火葬の普及している所を「都市とその周辺。そのほか主として真宗地帯」とし、具体的に新潟県では佐渡の対岸から西の地域と指摘している。また、「それ以外の広い地域では土葬の方があたりまえ」と言及している[井之口1977]。堀一郎氏は新潟県では「浜通り」と「平坦部」及び「信濃川流域」で火葬が多いと指摘している[堀1951]。

文献史学からは、寺島孝一氏が近世文書である『諸国風俗問状』及びその返答を紹介し、浄土真宗が盛んな新潟県において、門徒に火葬が多い点を指摘している[寺島2002]。

確かに現在（1983年調べ）、新潟県に所在する浄土真宗系寺院は、佐渡と県北（阿賀野川以北）を除く平野部に濃く分布し、山間部では希薄である。全宗派寺院に占める郡区別の浄土真宗系寺院の比率をみた場合でも「新潟」「西蒲原」「三島」「古志」「東・中・西頸城」といった平野部・沿岸部で過半数を占め、「佐渡」「岩船」「北・東蒲原」「北・中・南魚沼」「刈羽」といった山間部・県北・佐渡地域で30%を下回るなどその影響力が弱い地域であった。

つまりは、先述した発掘調査において火葬墓が優位に検出された地域に浄土真宗系寺院の分布が密であるように見える。一方で、「真宗地帯」＝「火葬」という短絡的な図式、即ち、火葬慣行が「特定宗派の規制力」に負うものであるかということについては、堀氏の指摘にあるように地下水位との関係や余剰地・材料との関連といった埋葬地の地理的要因[堀1951]は勿論のこと、埋葬者の生い立ちや死亡したときの状態など個々の埋葬事情を加味した考古学的観点から良く吟味・検証していく必要性が強く求められているといえよう。

火葬骨蔵器の選択性に関する傾向

本県では、火葬墓を検出した遺跡の発掘調査報告書において、実測図を伴い報告されている骨蔵器は100点ある〔相羽2009〕。

それらはすべて陶磁器(土器・瓦器含む)で、最多は肥前系陶器61点である。次いで越中瀬戸7点で、土師質土器5点、越前焼3点、信楽焼1点、高取焼1点、瓦器1点と続く。その他、産地不明陶器が4点ある。又、曲物や木箱、有機質の袋状のものも検出されている。なお、近現代の磁製骨蔵器は17点報告されている。陶磁器製容器はいずれも本県の近世遺跡で良くみられるやきもので、その選択にとりたてて特殊性は感じられない。しかしながら、それらの中には消費地遺跡ではみられないタイプのものもある。また、個々の骨蔵器が、専用容器か什器からの転用品であるかの検討は必ずしも十分とはいえない、意識及び社会情勢の変化を考える上で今後の大きな課題であるといえる。

容器容量については、過半数が3～7Lに納まり、現代東日本で通有の「七寸骨壺」に近似する。部分拾骨を慣例とし、小型の骨壺(「四寸骨壺」)を使用する西日本に対し、新潟県を含む東日本では全体拾骨を慣例とするため大型の七寸骨壺を使用するという〔浅香2007〕。本県出土の近世骨蔵器については、基本的に成人一体の焼骨すべてを収納するのに適したサイズを用いる傾向があると言える。出土事例からはその他、一部拾骨・分骨や子供用に使用されたと考えられる小型のタイプや、合葬・再葬に使用されたと考えられる大型のタイプも見られることから、適宜目的に応じて使い分けていたと考えられる。

副葬品の様相

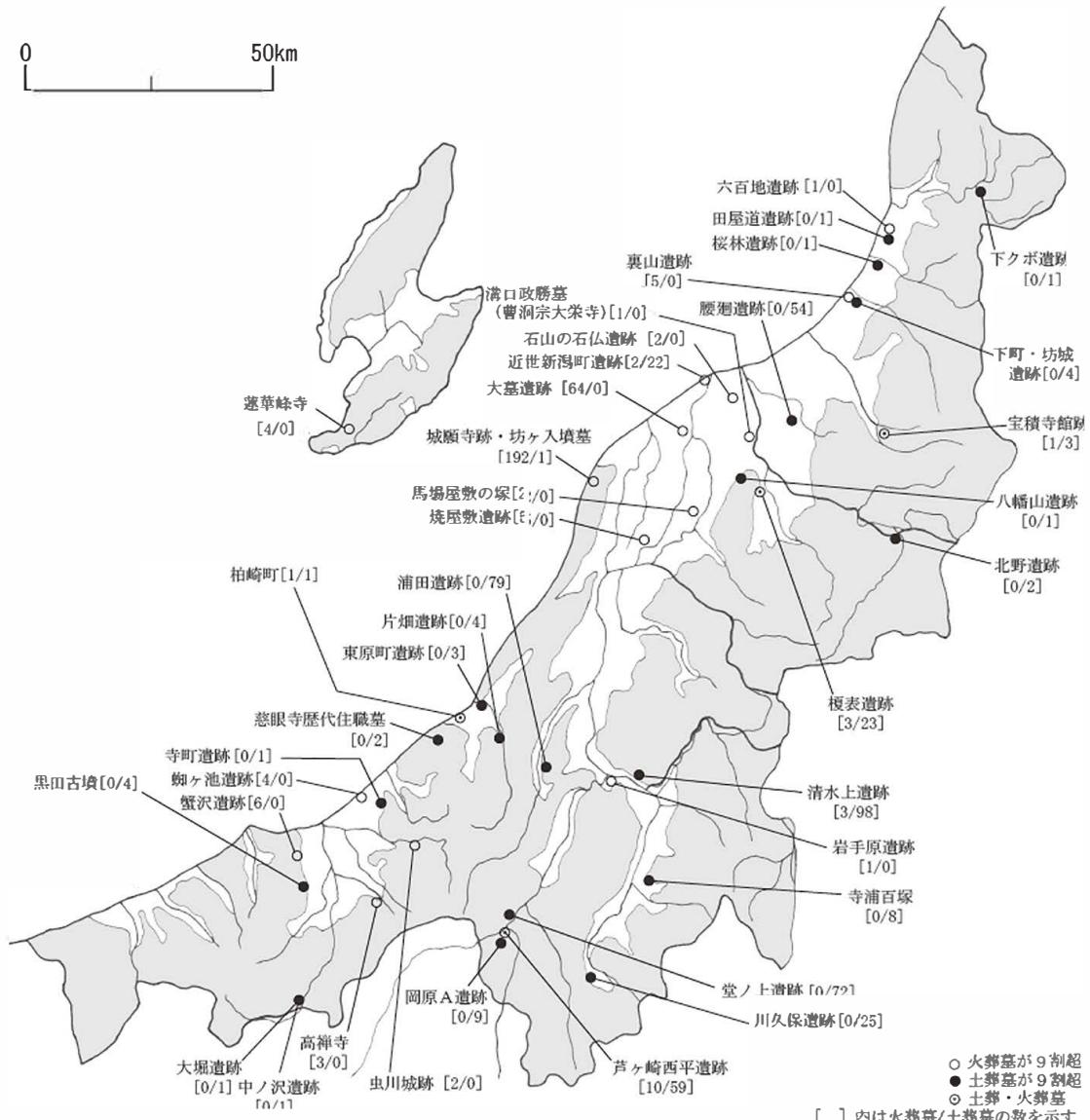
事例は少ないが、土葬墓を中心に認められる。特に寛永通宝を基本とした六道銭は多くの墓で通有にみられるものであるが、枚数は一定していない。それらには有機質編物痕が付着しているものもあることから、頭陀袋等に入れられるケースもあったと考えられる。その他、漆器椀・近世陶磁器・刀子・煙管・鏡・数珠・山笠などが少量見られる。こうした出土副葬品は民俗例との共通性が強く認められる。

埋葬容器の変遷

良好な調査事例が極めて少なく判然としないものの、これまでの事例から出現順は、火葬墓では火葬骨直葬(有機質袋状容器など含む)→陶製骨蔵器→専用骨蔵器、土葬墓では縦位桶棺→横位桶棺→縦位箱棺・横位箱棺といった出現順序が想定されている。その他、土葬墓では近世前半に横位箱棺が単独で検出される例があり、中世屋敷墓との関連が窺われる。

【引用・参考文献】

相羽重徳 2009 「新潟県における近世骨蔵器の諸相」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
浅香勝輔 2007 「糸魚川から伊良湖岬まで」『火葬後拾骨の東と西』火葬研究叢書2、日本葬送文化学会編、日本経済評論社
井之口章次 1977 「葬送の種類」『日本の葬式』筑摩書房
寺島孝一 2002 「土葬と火葬のあいだ」補遺」『考古学ジャーナル』486、ニューサイエンス社
堀 一郎 1951 『民間信仰』岩波書店



第1図 発掘調査された近世墓 [相羽 2009 より転載]

【参考文献】 1. 新潟県朝日村教委 1991 「下クボ遺跡」 2. 神林村教委 2002 「六百地遺跡」 3. 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、「県教委・財」と略) 2008 「田屋道遺跡 I 宮の越遺跡 I」 4. 県教委・財 2008 「中部北遺跡 桜林遺跡 II」 5. 中条町教委 1993 「築地 裏山遺跡」 6. 中条町教委 1999 「下町・坊城遺跡 III」 7. 新発田市教委 1990 「三光館跡・宝積寺館跡」 8. 笹神村教委 2002 「腰廻遺跡」 9. 県教委・財 2005 「北野遺跡 II (上層)」 10. 新潟市教委 2007 「近世新潟町遺跡」「平成 18 年度新潟市文化財調査概要」 11. 甘柏 健ほか 1994 「石山の石仏遺跡(遺跡番号九五)」「新潟市史資料編 1」新潟市 12. 福田仁史 1999 「越後沢海藩主溝口政勝の墓」「新潟県の考古学」高志書院 13. 新津市教委 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」 14. 五泉市教委 2005 「榎表遺跡」 15. 白根市教委 1984 「馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書」 16. 新潟県教委 1973 「大墓遺跡・积迦堂遺跡・半ノ木遺跡」 17.18. 卷町教委 1985 「城願寺跡・坊ヶ入墳墓」 19. 新潟県教委 1976 「焼屋敷遺跡・杉之森遺跡」 20. 県教委・財 1996 「清水上遺跡 II」 21. 新潟県教委 1980 「上の原 II・III 遺跡 木下屋敷遺跡 岩出原遺跡」 22. 中里村教委 2005 「堂ノ上遺跡」 23. 津南町教委 2002 「芦ヶ崎西平遺跡」 24. 津南町教委 2005 「岡原 A 遺跡」 25. 六日町教委 1974 「寺浦百塚発掘調査報告書」 26. 湯沢町教委 1986 「川久保遺跡」 27. 小国町教委 2000 「浦田遺跡発掘調査報告書」 28. 柏崎市教委 2001 「宮之下遺跡群」 29. 県教委・財 2005 「東原町遺跡・下沖北遺跡 II」 30. 柏崎市教委 2001 「柏崎町」 31. 柏崎市教委 2004 「慈眼寺歴代住職墓」 32. 県教委・財 1995 「宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡」 33. 吉川町教委 1995 「寺町遺跡第二次発掘調査報告書」 34. 新潟県教委 1981 「蜘蛛池遺跡」 35. 県教委・財 2004 「蟹沢遺跡」 36. 県教委・財 2002 「黒田古墳群」 37. 清里村教委 1999 「等仙寺・梶木・山崎塚遺跡」 38. 県教委・財 1997 「中ノ沢遺跡」 39. 県教委・財 1996 「大堀遺跡」 40. 小木町 1984 「佐渡国蓮華峰寺骨堂修理工事報告書」

東北地方日本海側における近世墓

高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター）

東北地方日本海側にあたる山形県、秋田県、青森県で発掘調査された近世墓あるいはその関連遺構が確認された遺跡は、第1表に示したように多くはない。当該3県では青森県が突出した形を示しているが、それは東部の太平洋側に集中し（第1図24～42の19遺跡で約250基）、西部の日本海側では限定的である。検出事例が少ないとについては、発掘調査の対象となることが稀な近現代あるいは現在も利用されている墓地の成立時期や各種開発予定地内の地目（墓地、境内地）を考慮した発掘回避なども要因と考えられるが言及できない。

本稿では、発掘調査された当該地方の近世墓について、葬法とその分布状況について紹介する。

1 葬法とその分布状況

①火葬墓 埋葬方法が明確な遺構に限定すれば、火葬墓は秋田県の中～南部と青森県中～北西部に分布し、山形県や秋田県北部、青森県東部では未確認である。青森県中～北西部の五所川原市隈無（8）遺跡では火葬場跡も調査されている。火葬骨の収納容器では、弘前市の弘前藩津軽家墓所のうち第3代藩主津軽信義墓から信楽焼の茶壺が出土している。秋田県横手市の本郷家墓地（第2図）では底部を打ち欠いた肥前産大甕に火葬骨を収納していた。その他、多くの火葬墓は容器をもたず、土坑に直接納められたようであるが、13世紀代の事例では曲物容器に火葬骨が入れられていた事例も存在する。いずれにしろ、本集成作業を通して火葬墓の確認件数が予想以上に少ないと、分布の遍在を記録しておく。

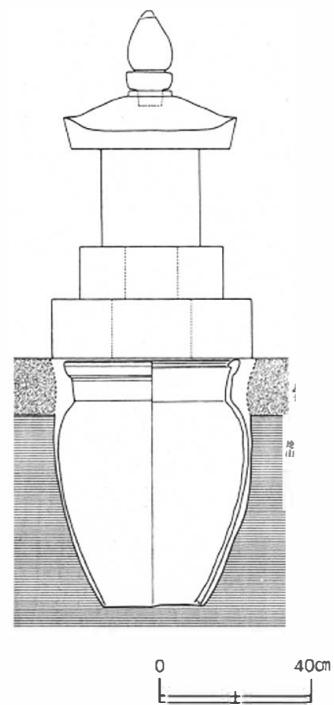
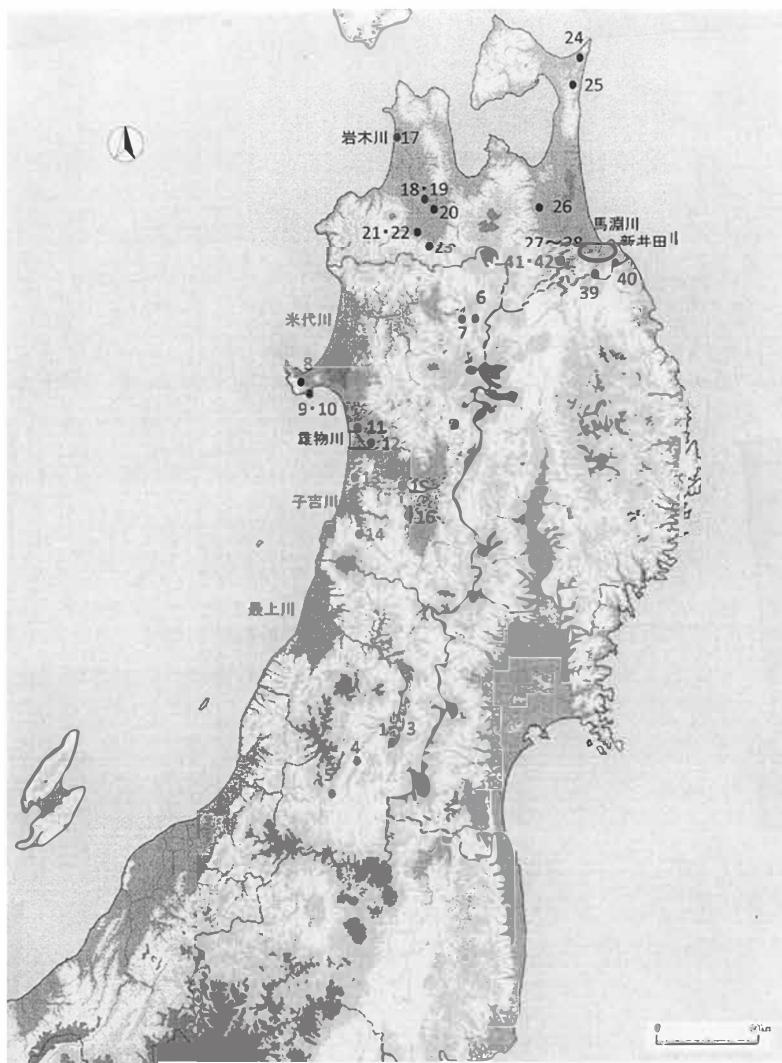
②土葬墓 土葬墓では遺体を木棺等の容器に埋納する場合と土坑内に直葬する二者が想定される。前者では平面形が長方形・方形を示す直方体・立方体箱形木棺と円形の桶形木棺（早桶）といった木質容器が認められるが、陶製の甕棺などは未検出である。ただし、木棺の場合であっても、部分的な木片や押圧痕としての確認に留まる事例が多く、全体構造を復元できる遺構は極端に少ない。このなかにあって、木棺が多く確認された山形市渋江遺跡の例を紹介する（第3図）。

ここでは二度の調査で200基の近世墓（18世紀後半～19世紀後半）が検出された。うち、第4次調査区で確認された169基の墓については、箱形木棺93基（55%）、早桶12基（7%）、直葬64基（38%）とするデータが示されている。箱形木棺には、土坑底面に複数の横木を渡した上に筵を敷き、その上に木棺を置くタイプ（箱形A）と底面に直接木棺を置くタイプ（箱形B）に分けられる。その基数は、箱形Aが52、箱形Bが17である。

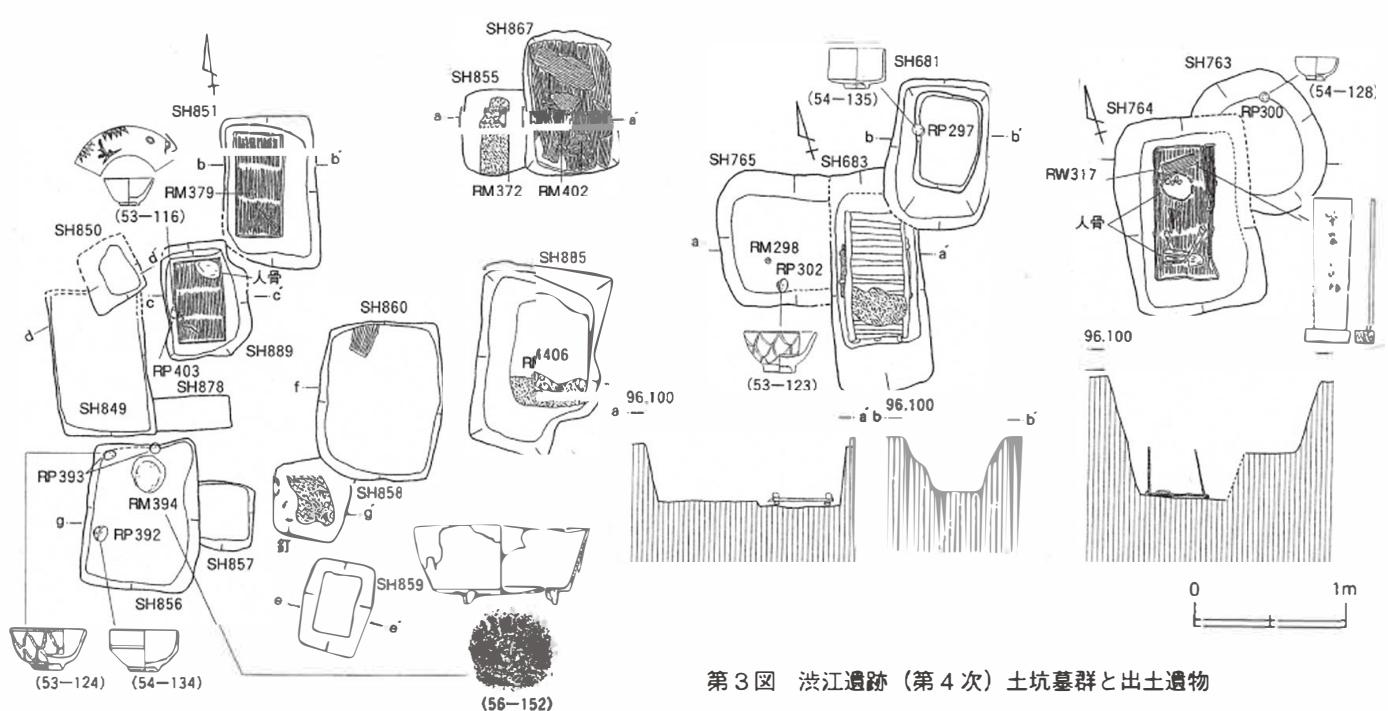
2 まとめ

東北3県における近世墓の集成作業により、該当する遺跡数が多くはないという想定内であったものの、分布の偏在はそれを超えるものであった。すなわち、青森県東部域に一定数の土葬墓が存在するのに対し、日本海沿岸部の山形県庄内地方や秋田県北部～青森県西部では極めて限定的である。加えて火葬墓の抽出数が予想以上に少ないと確認できた。分布の多寡・偏在の要因をここで述べることはできないが、当該沿岸部域に浄土真宗の寺院・門徒数が多いこと、真宗が火葬の奨励を積極的に行っていることも因子として考慮する必要があるのかもしれない。

なお、紙数の関係から文献類は記載を省略している。研究集会の発表要旨・資料集を参照されたい。



第2図 本郷家墓地 墓塔と収納容器



第3図 渋江遺跡（第4次）土坑墓群と出土遺物

第1表 山形・秋田・青森県（日本海側）の近世墓・関連遺構検出遺跡一覧

番号	遺跡名	調査区	所在地	立地	時期	遺構の概要	遺物の概要	調査所見・備考	文献
1	中道南遺跡		山形市飯塚町	山形盆地、標高104mの沖積地	近世	土坑墓1基	骨片、木棺、寛永通寶4枚	山形盆地中央部に位置	1
2	渋江遺跡	平成12年調査 第4次	山形市渋江	標高96mの自然堤防上。調査区に隣接して現寺域あり	17世紀後半～以降	土坑墓31基、直方体・立方体箱形、早桶、直葬あり	人骨、酒杯（伊万里）、水注（陶器）、漆碗、寛永通寶	寺域（真福寺）の北側に位置	2
					18世紀後半～19世紀後半	土坑墓169基。埋葬施設は、平成12年調査区と同じ。箱形には、土坑内に直接置くものと、底部に横木を渡し、その上に筵を敷くものの別あり	人骨、陶磁器（肥前系、福島・宮城産）、煙管、位牌、土人形（東北地方産）、鉄鍋（三足）、数珠、下駄、漆器皿、漆塗箸（竹製）、硯、米、寛永通寶、渡来鏡	鍋被り葬あり。位牌は3基から出土、材質は杉と柳。木棺には「五」「正」「〇」などの墨書きあり、材質は杉や松	3
					近世	土坑墓13基	人骨、内耳鉄鍋（丸型湯口）、寛永通寶、渡来鏡	鉄鍋の内部には頭蓋骨が残存しており、鍋被り葬と判断	4
3	双葉町遺跡		山形市双葉町	標高130mの扇状地上。山形城三の丸跡	近世	土坑墓13基	人骨、内耳鉄鍋（丸型湯口）、寛永通寶、渡来鏡	鉄鍋の内部には頭蓋骨が残存しており、鍋被り葬と判断	4
4	北ノ台墓所遺跡		西置賜郡白鷹町鮎貝	平地	近世	土坑墓	寛永通寶、漆器碗、鉄製品、銅鏡		5
5	郡之神遺跡	第1次 第2次	西置賜郡飯豊町椿	標高243mの段丘上	近世～現代	土坑墓11基、詳細な記述なし		調査区の隣接地に墓地、塚あり。1基は一字一石経を伴う経塚で江戸前期の構築	6
						土坑墓17基、平面形は隅丸長方形、方形	寛永通寶、櫛。副葬品を伴う墓は2基のみ		7
6	柴内館跡	D区	鹿角市花輪	米代川水系、標高160mの舌状台地上	17世紀前半～18世紀後半	土坑墓14基。人骨確認は12基。埋葬形態は座位屈葬、横臥屈葬、仰臥屈葬の別がある	寛永通寶、無文鏡、切羽、煙管、数珠玉、銅製鏡、銅製皿、和鉄、火打ち金、木製櫛、鉄釘	東北大学大学院医学系研究科（百々幸雄他）人骨12体の鑑定報告	8
7	大日堂前遺跡		大館市比内町独鉱	米代川水系、標高110mの台地上	中世末～近世	小土坑内に石塔が立った状態で検出	骨片の出土はなし	土坑前面に陶製の長頸壺（常滑系か）が置かれていた	9
8	真山遺跡	第Ⅱ区	男鹿市北浦真山	男鹿半島西部、標高160mの丘陵地上	15世紀以降	41基の墳墓群が点在。うち22基	2基から珠洲V期相当の擂鉢片、少なくとも3基からは染付皿、煙管、寛永通寶や鉄片等出土	墳墓群は明治初年に廢寺となつた光飯寺住職の墓地との伝承が残る地	10
9	脇本館下II遺跡	第12次	男鹿市脇本脇本	男鹿半島南端、標高22mの丘陵上	近世	土坑墓3基。方形基調のプラン、1基の一辺は12m	板材（木棺か）、寛永通寶、漆塗製品	脇本城跡の東側に位置、脇本城関連の宗教施設か	11
10	脇本城跡	お念堂地区	男鹿市脇本脇本	男鹿半島南端、標高20mの丘陵上	16世紀前半～17世紀前半	沢の護岸施設として、杭列と横板等の木材が多用された状態で検出。横板として柱状塔婆が転用	柱状塔婆4基（最大のもの長さ約28m）。沢部包含層から柿絞、笠塔婆、板塔婆の木製品	城跡の南西端部に位置。「月心明宗大姉龜●位」と印刻の墓石出土	12
11	秋田城跡	第10次 第42次	秋田市寺内鶴ノ木	旧雄物川河口、標高50mの台地上	中世末～近世	土坑墓10基。形状は一辺・長軸1～15mの楕円形・円形	永楽通寶、洪武通寶、大■通寶、■寧元寶、寛永通寶、人骨	古代城柵秋田城跡の外郭築地崩壊土上面に構築	13
			秋田市寺内鶴ノ木	旧雄物川河口、標高39mの台地上	近世	土坑墓1基。径15m、深さ80m	土坑内に素焼きの壺を正位に埋納、染付皿が入れられていた		14
12	黒沼下堤下館跡		秋田市河辺北野田高屋	標高35～40mの丘陵地	18世紀前半～以降	土坑墓6基	人骨、寛永通寶（秋田川尻銭）、炭素窒素同位体分析		15
13	龍門寺茶畠遺跡		由利本荘市岩城町赤平	日本海沿岸部、標高28mの段丘上	17世紀代	土坑墓1基。輿状の木製葬具を伴う土葬墓であり、改葬を受けているとする	鉄釘、銅製品、木製品。土坑周辺出土の陶磁器は17世紀中頃を主体	遺跡に隣接する龍門寺は、近世・岩城氏の菩提寺、1628年の開山	16
14	助の渕遺跡		由利本荘市矢島町七日町	子吉川水系、標高50mの沖積地	17世紀初頭か	火葬関連の土坑20基、堅穴状遺構3基検出。火葬骨が出土したのは4基、土坑は長軸平均11m、短軸0.7mの楕円形、不整円形	火葬骨以外の遺物なし。火葬骨と灰層、焼土層、炭化物層、炭化物を確認	遺跡は12世紀末～13世紀半ばまで鉄生産、以降は掘立柱建物や井戸からなる集落跡	17
15	西板戸遺跡		大仙市南外字西板戸	雄物川水系、標高20mの段丘上	18世紀前半～以降	土坑墓4基。平面形は円形と隅丸方形、桶や方形棺の痕跡あり、径一辺が06～08m	寛永通寶（秋田川尻銭）、土人形、漆器片。土人形は3基から6体出土	2014年調査、未報告	18
16	本郷家墓地		横手市大森町榎形	雄物川水系、標高40mの丘陵上	19世紀前半～	無銘の墓塔下に肥前産の大甕を埋設。墓石は宝塔を簡素化させた形態、擬宝珠、笠部を含め五層からなる。墓塔は淨土真宗特有の形態	大甕は底部を欠失後に正位で埋設。現存高66cm。口径472cm。最大径507cm。火葬骨充填	石材は肉眼観察では安山岩であり、地元産の「鰐川石」の可能性が高い	19
17	十三湊遺跡	第15次 第34次 第83次 第95次	五所川原市十三（旧市浦村）	岩木川河口、潟湖である十三湖と日本海に挟まれた砂丘上	19世紀	土坑墓4基	煙管		20
					近世	土坑墓1基			
					19世紀	土坑墓8基、火葬墓1基。土坑墓は棺箱。	煙管	浄土宗湊迎寺の東側隣接地	
					17世紀か	火葬墓10基		湊迎寺境内	
18	隈無（2）遺跡		五所川原市羽野木沢	岩木川水系、標高25mの丘陵上	近世	火葬場跡1。石組の焼き場2基と、これを囲む溝からなる。石組はシルト・珪藻土を板状・煉瓦状に切り出したブロックを使用	男根形の石製品、未炭化の小豆	近世とする根拠を示した記述はない	21
19	隈無（8）遺跡	B区	五所川原市羽野木沢	岩木川水系、標高21mの丘陵上	近世後期	土葬墓8基、火葬墓11基	人骨、寛永通寶。土葬墓は副葬品なし、火葬墓も2基から錢貨が出土するのみ	その他時期不明の土坑のなかには近世以降の墓が含まれている可能性あり	22
20	長溜池遺跡		青森市浪岡町女鹿沢	岩木川水系、標高36mの段丘上	18世紀	土坑墓7基。円形周溝を伴う土葬墓あり	人骨、寛永通寶、煙管、白磁小盃、ガラス玉、釘		23
21	弘前藩津軽家墓所		弘前市新寺町	弘前城下の報恩寺内	17世紀中頃～19世紀後半	津軽家に関連する13墓が調査された。遺体が埋葬されていたのは3代藩主信義と子息墓3基のみ。信義墓はヒバ材で組んだ木棺のなかに割り抜きの石棺を置き、火葬骨を入れた信楽焼の茶壺が納められていた。子息墓は土葬墓	子息墓のうち、津軽承祐墓は第11代藩主津軽順承養子（安政2年1855没、18歳）。副葬品には太刀、古今和歌集、喫煙具、小銭。他子息墓には六角塔婆、ガラガラ、櫛、簪、土人形など	報恩寺は津軽藩主の菩提寺、天台宗。昭和29年調査、3～11代の藩主墓と藩主の子息墓4基	24
22	松前藩13代藩主松前徳広墓所		弘前市西茂森1丁目	弘前城下の長勝寺内	1868年（明治元年）	木室・木棺からなるが木棺なく、改葬墓。明治3年に北海道松前町法幢寺に改葬	角塔婆、櫛、元結、繩、剃刀、和鉄、砥石、鉄製箸、竹製箸入れ、和紙	長勝寺は津軽藩主当初の菩提寺、曹洞宗。平成24年調査	25
23	鶴ヶ鼻遺跡		南津軽郡大鰐町宿川原	旧羽州街道に近接、標高85mの丘陵先端部	近世～明治	土坑墓1基、火葬墓15基。土坑墓は長径11mの楕円形、火葬墓は不整形が多い	土坑墓には人骨、板碑、煙管、墨、火葬骨細片のみ、周囲から寛永通寶など採集	板碑は墓標代わりに、あるいは遺体に蓋をする意図で置かれたか	26

※脇本城跡備考欄の●印は、「靈」の古字である「冥」

1～5：山形県、6～16：秋田県、17～：青森県

討論と見学会について

8名の講師による発表終了後、総括として討論が行われた。コーディネーターは当センターの川畠誠が務めた。発表を通じ痛感されたのは地域間の多様性であり、討論では主に3つのテーマで共通点を見出す試みが取られた。

火葬と土葬の展開：近世は火葬から土葬への転換と言われるが、これは中世的墓制である火葬と、近世的墓制である土葬の対比としての端的な表現と理解でき、実際には時系列・地系列、さらには仏教宗派・階層性といった



討論の様子

様々な様相の中で火葬と土葬は近世において併存していることは各氏の発表を通じ理解される。一部の事例を除き、両者は排他的なものではない。谷川章雄によれば火葬→土葬の転換と近世寺院の成立はほぼ時期を同じくしており、「近世寺院と近世墓の成立が深く関わっていたことが想定できる」とする。土葬への大きな流れの中でなお火葬が採用されるのは、浄土真宗に顕著な宗派としての葬法の他に、火葬の本質的な事象である「遺体のコンパクト化」も考える必要があろう。

発掘調査事例で言えば、九州・石川・富山・新潟は火葬と土葬が併存していることが確認されている。土葬を主体とするのは山陰・福井県若狭地域・東北日本海側で、福井県越前地域においては火葬主体である。とは言え、「江戸時代以来の墓地は現代でも利用されており、発掘調査される機会は希少なのだ」とする村上氏の言葉に耳を傾ければ、上記の諸様相を類型化できるほど発掘調査事例は多くなく、現時点での傾向と見るべきであろう。

埋葬施設：土葬では、遺体を木製容器（早桶・木棺）に入れるものと甕棺に入れるものがあり、被葬者の階層性を示すとされている。木製容器の差異は、掘り方の平面形態によるものと、遺体の収納形態によるものがある。平面形態の差異は具体的には円形坑と（長）方形坑の違いとして現れるが、地域ではばらつきがある。円形→（長）方形の移行が見られる九州・石川例や、長方形が先行し円形・方形が併存する山陰の例が提示されたが、近世を通じて円形のみという特殊な調査例もあることから一概には言えない。収納形態の差異－臥屈葬か座葬か－は、長方形棺と早桶・方形棺の違いである。こちらについての議論は深められていない。中～下位武士層や農商民が用いる木製容器のほかに、高級武士層・僧侶等は甕を棺に用いる。九州では肥前系陶器の甕が、山陰では越前焼の甕のほか地元産が、石川県ではほぼ越前焼の甕が用いられる。一方福井・富山・新潟・東北では甕棺の検出例がない。これらの甕が日用品の転用なのかあるいは専用品かははっきりせず、石川県の越前焼甕は焼きが甘い・調整が粗雑・大型といった特徴から、あるいは特注品（ないし専用品）ではないかとの指摘もあった。

副葬品～トラベルセットは見出せるか：山陰地方を報告した中森氏によれば、山陰両県の近世墓から出土した副葬品は「銭貨・刀物類・煙管」という3点で構成されるケースが多いという。この六道銭・魔除けと考えられる刃物・個人の愛玩品を、被葬者が黄泉路へ旅立つ際に持たせる「トラベルセッ

ト」と理解した。九州では銭貨が主で、櫛・眼鏡のような愛玩品は時代が下がると出てくるとのこと。福井県は銭貨・土師皿が目立つ程度で副葬品は少ないが、浜瀬遺跡のように鉄製品を副葬した例もある。石川県は早桶・甕棺に副葬品が多く、早桶では銭貨・数珠・漆器椀（及び什器）・箸の組み合わせが目立つ。甕棺では銭貨・土人形・煙管が目立ち、方形木棺でも同様の傾向が見られるが時代が下ると薄葬の傾向がある。新潟県では銭貨と漆器椀のセットが目立つ。東北地方では銭貨・煙管にセット関係が見られ、数珠や漆器椀が入ることがある。太平洋岸の南部藩地域では、日本海側にはほとんど見られない火打金が入る傾向がある。いずれも共通するのは六道銭を納めることで、煙管に代表される愛玩品は、数珠や櫛に形は変わるが入れる傾向が多い。刃物は納める地域が散見されるが、山陰は顕著である。また石川県以北では漆器椀を入れるケースが目立っている。

他にも福井県若狭地域に顕著に見られる両墓制の問題、墓標に見られる階層性、個人墓から家族墓への移行などのテーマがあったが、いずれも議論を深められないまま終わったのは残念であった。

発表・討論に加わって改めて感じたことは、近世墓とは地域・時代・宗派が複雑に絡み合って今に残されるものであり、その多様性に圧倒された。それは、テーマを絞りきれなかったこと（絞りすぎると事例そのものが抽出できなくなる、発掘調査事例の少なさ）からの帰結として当然のことではあったが、当初事務局側が心配していた「本当に各地で事例が集められるか」という悩みは杞憂に終わった。精力的に事例を集め、分析し、発表いただいた報告者各氏には深く謝意を表したい。

研究発表の翌日に行われた見学会では、資料見学、現地見学の2本立てで実施した。資料見学では、石川県の木ノ新保遺跡、金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）の遺物を前にして活発な意見交換が行われた。なかでも、金沢の城下町遺跡で出土が顕著な土人形について、どういった目的で入れられるのか、そのセット関係はどうかなどの質問が相次いだ。資料見学の後、野田山墓地と金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）の現地見学を実施した。野田山墓地は、発表者の庄田氏とご同行いただいた滝川重徳氏の案内の下、大急ぎの行程であったが、藩主前田家墓所～八家墓所～一般の墓所を周った。墓地の中には、埋葬後小さなマウンドを築き、その上に墓標を載せる江戸時代そのままの姿を残すものも散見され、また時津氏の発表にあった「墓標の巨大性は階層性そのものを現す」あり方を、八家墓所～一般墓所でさまざまと感じることができた。

（和田 龍介）



資料見学の様子



現地見学の様子